

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集

觀音林遺跡

(第五次発掘調査報告書)



【観音林遺跡出土、大洞A式期の土偶】

1987. 3. 20

青森県五所川原市教育委員会

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書

第 1 集	1968	津軽・前田野目窯址	
第 2 集	1974	原子遺跡	
第 3 集	1975	観音林遺跡	①
第 4 集	1979	狐野遺跡	①
第 5 集	1980	狐野製鉄遺跡	②
第 6 集	1983	福泉遺跡	
第 7 集	1984	観音林遺跡	②
第 8 集	1985	観音林遺跡	③
第 9 集	1986	観音林遺跡	④
第 10 集	1987	観音林遺跡	⑤

序 文

五所川原市教育委員会

教育長 高橋清徳

観音林遺跡は、昭和48年に発見され、今回で第五次発掘調査報告書が発刊されることにいたりましたことは、まことにご同慶にたえません。

観音林遺跡の発掘進展は、地域文化の向上に大きく貢献し、13年間にわたる研究は、多くの人々に深い感銘と励ましをえてまいりました。

この報告書によって、私達は、先人の文化の実態を後世に伝える使命をはたすことができましたことを喜ぶものであります。

最後に風雨に耐えながら、ご協力下さいました諸先生はじめ関係各位に衷心より感謝申し上げ、第五次調査報告書が次への飛躍台になれば幸いと存ずる次第であります。

例　　言

1. この報告書は、五所川原市教育委員会が昭和61年7月16日～8月2日の期間に実施した観音林遺跡第五次発掘調査の記録である。
2. 本報告書のうち、出土した骨類の鑑定は、早稲田大学金子浩昌氏に鑑定を依頼し、その結果については「表2」に示したとおりである。ここに記して感謝申し上げる次第である。
3. 昭和60年度（第四次発掘調査）において出土した「刀子状鉄製品」については、岩手県立博物館の御好意により、中間報告としての分析結果をいただいた。分析に直接当たられた赤沼英男氏に御礼申し上げる次第である。その「金属学的解析結果」については本文に記述してある。
4. また、今回の調査で出土した「植物炭化物」については、日本植物学会々員木村 啓氏に同定を依頼し、御回答をいただいた。ここに記して感謝申し上げる次第である。
5. 本報告書のうち、地学に関する事項は、日本地学教育研究会々員、川村真一が担当執筆した。
6. 出土した土器等の復原は、金木小学校校長 浅木全一が担当、五所川原市教育委員会 佐藤文孝・船水 寛が復原に参加した。
7. 地形の測量、実測図の作成等は、市都市建設課員が担当、人員の輸送、器材等の準備は、五所川原市社会教育課員が担当した。
8. 本報告書のうち、セクション図の作成等は、各調査員が分担して原図を作成した。
9. 出土した遺物は、すべて五所川原市教育委員会が市立歴史民俗資料館に保管し、歴史研究の資料に活用する。
10. おわりに、第五次発掘調査を快諾下され、便宜を図っていただいた地主である長尾良治氏に感謝申し上げる次第である。

目 次

序 文

例 言

目 次

土偶写真	アスファルトを目・口に詰めた土偶	1
第1図	観音林遺跡付近地形図	2
第2図	第五次発掘調査グリット配置図 (遺跡所在台地航空写真)	3
第3図	第一～第六次（予定）発掘調査グリット配置図	4
発掘スナップと遺物の出土状況（写1～写10）		5
第4図	観音林遺跡基本層序図	15
第5図	A地区J 1グリット北壁セクション図	16
第6図	A地区J 1～J 2グリット東壁セクション図	17
第7図	A地区E 5・F 5グリット平面図	18
第8図	A地区F 5グリット西壁セクション図	19
第9図	C地区BグリットD 1・E 1区セクション図 ①D 1区東壁セクション図 ②ケ ケ北壁セクション図 ③E 1区東壁セクション図 ④ケ ケ南壁セクション図	20
第10図	C地区X 1グリットセクション図 ①C地区X 1グリット北壁セクション図 ②ケ ケX 1グリット東壁セクション図	21
第11図	C地区Bグリット検出、2号住居址実測図	22
第12図	C地区Aグリット検出、1号住居址実測図	23
第13図	C地区X 1グリット検出、井戸層序図	24
〔1〕調査経過と調査要項		25
	（1）第五次発掘調査に至るまでの経過	
	（2）第五次発掘調査	
	④調査要項	
	⑤グリット、トレチの設定	
〔2〕地形・層序		32
	（1）地形	

(2) 地質および層序	
〔Ⅲ〕 出土遺構	34
(1) 第一～第四次発掘調査で出土した遺構	
(2) 第五次発掘調査で出土した遺構	
①号住居址	
②号住居址	
③その他	
表1　・縄文時代編年表（付観音林遺跡出土、土器編年表）	37
表2　・観音林遺跡出土、骨類鑑定表	38
〔Ⅳ〕 出土遺物	39
(1) 土器・土製品	
①土製品	
②土器	
表3　・観音林遺跡出土、石器・石製品一覧表	45
(2) 石器・石製品	
(3) 観音林遺跡出土、鉄製品について。	
(4) タ　　タ　　骨類について。	
(5) タ　　タ　　植物遺物について。	
〔Ⅴ〕 考　察	63
AP・L 1～65 → 完形・復原土器	
P・L 1～46 → 破片土器	
S・P・L 1～20 → 石器・石製品	
B・P・L 1～5 → 骨類	
S・P・L 19 → 植物遺物	
☆参考文献	205

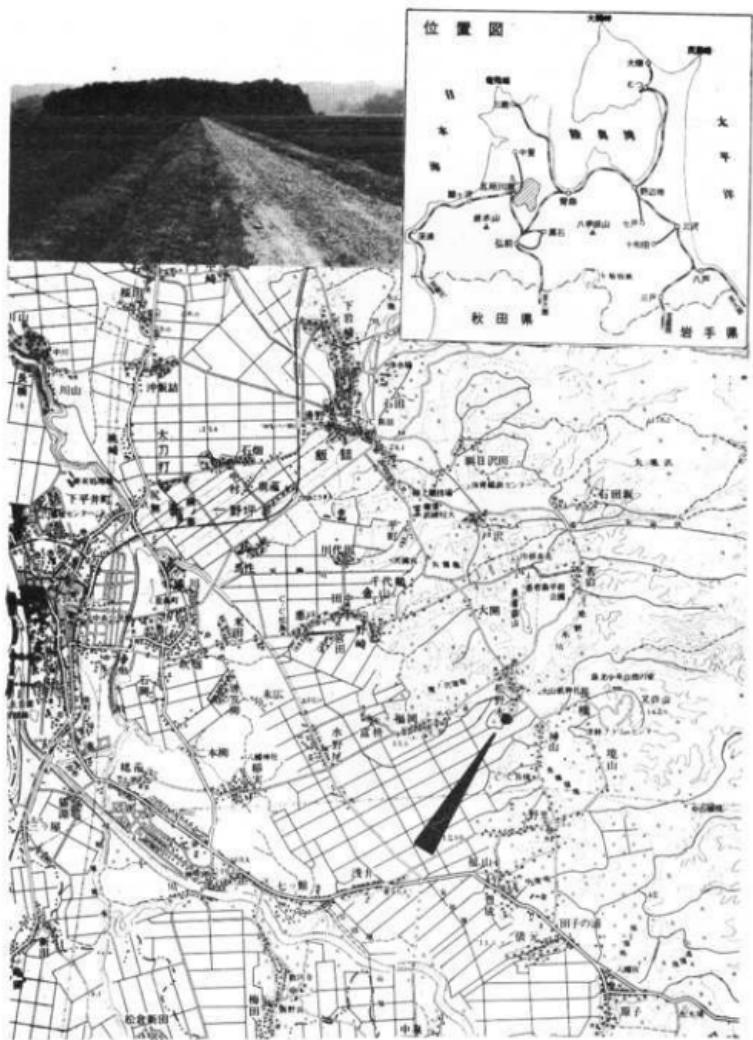
〔土偶写真〕 アスファルトを目・口に詰めた土偶



A地区K 1 - II 出土土偶

〔第1図〕観音林遺跡付近地形図 S=1:50000

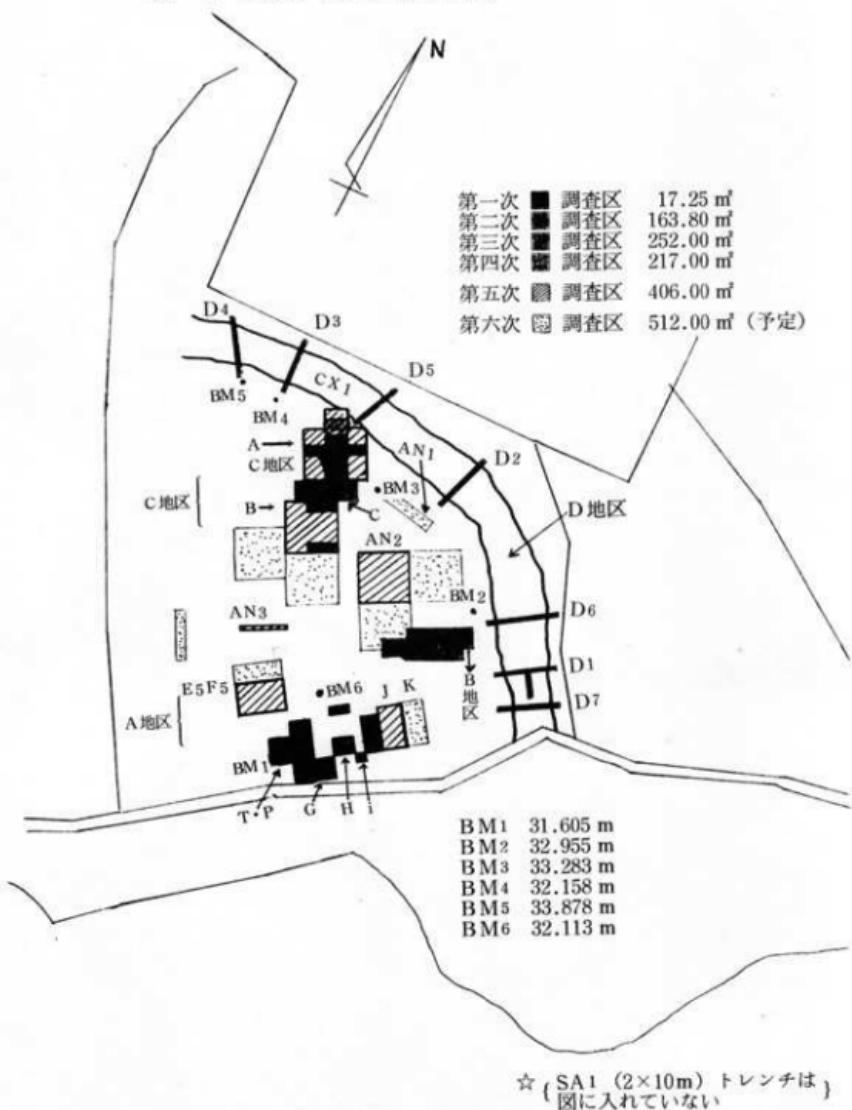
☆觀音林遺跡遠景



〔第2図〕観音林遺跡付近航空写真とグリッド、トレンチ配置図（第五次）



〔第3図〕観音林遺跡グリット・トレンチ配置図
 (第一次～第五次・第六次予定を含む)





①

- ・チビッコ考古学者も
遺物を発見！

AJ2 グリット



②

- ・手袋をはめて記念にバチリ
発掘体験

AJ2 グリット



③

- ・五所川原市内小学生の
見学風景

AK1 グリット



④

- ・見学だけでは！
わたしたちも掘りたいなあ

AJ2 グリット

一屋やすみのひととき—

・調査員は仮眠でつかれ
をとる。

☆中央は、発掘指導に来五
の市川金丸氏（現理文センター）

(5)



(6)



・遺物係りの袋詰め、
カードを入れたかな？

C B グリット

(7)



・CAグリットの発掘風景
ベルトコンベアで掘る

(8)



・ベルトコンベアが作動した

CAグリット



⑨

- ・CAグリットの黒色土は深い。
2台のコンベアで男たちは発掘に励む。

⑩



・ベルトコンベアの移動

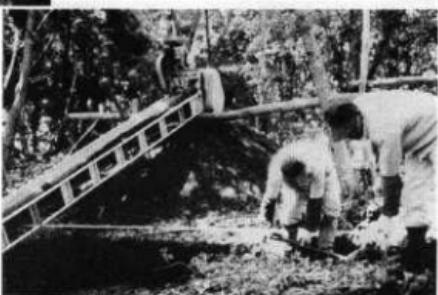
⑪



- ・Ⅰ・Ⅱ層は剥ぎとった。Ⅲ層は原黒土層である慎重に♪

CAグリット

⑫



・CAグリットの荒掘り
遺構が伸びてる/
拡張区を掘る



⑬

AJ2 グリットの土層を調べる調査員（川村・小山）



・CBグリットの発掘
2号住居址の壁面
が出てきた。

⑭

・女性も頑張る。/
AN3 トレンチの発掘/
I・II層は薄く、III・IVは
ない。
I・II・V層とつづく。/
/

⑮



⑯

・CAグリットの精査。/
1号住居址の床面が
姿をあらわす。

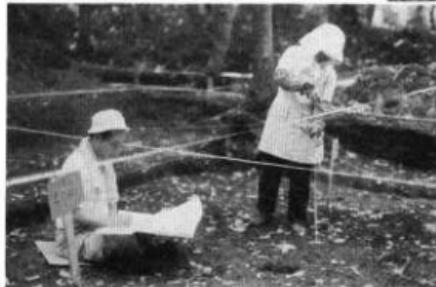
⑯

・ 1号住居址の
実測をする調
査員（小野・渡辺）



⑰

・ 2号住居址の実測をする
調査員（水沢・作業員）



⑱

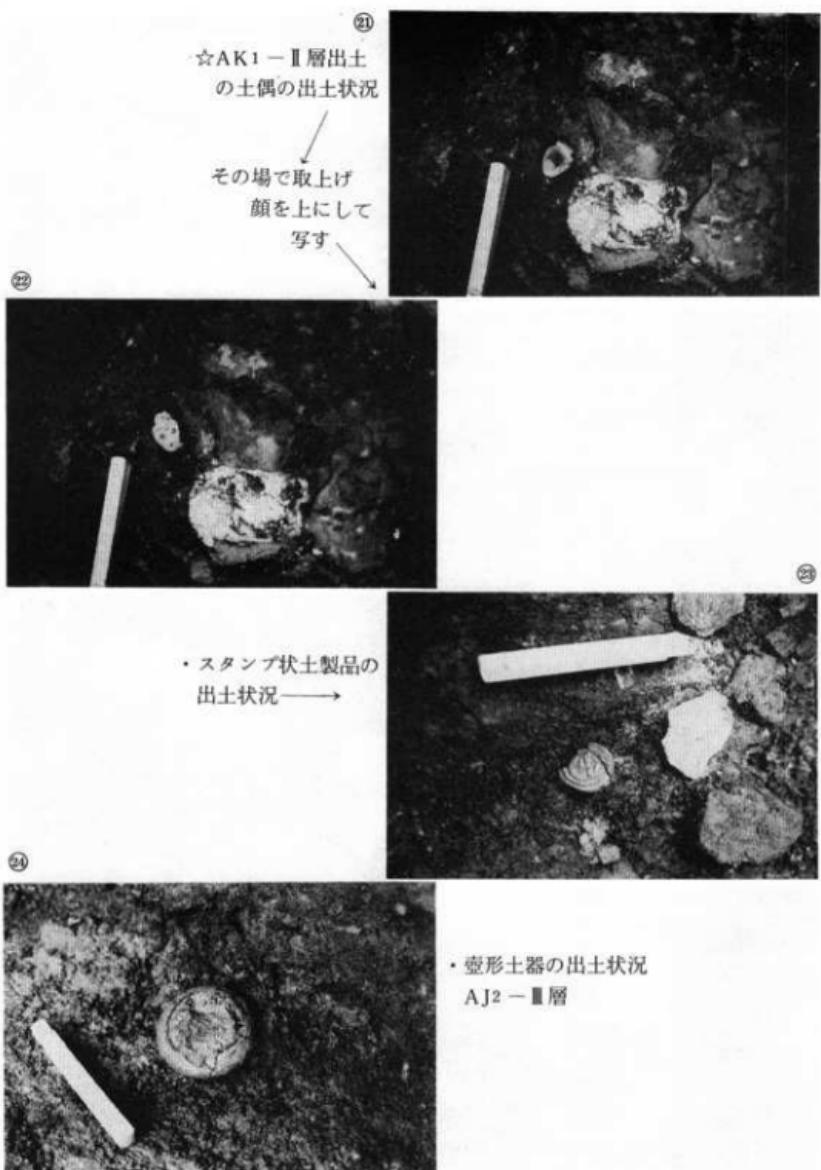
・ 柱穴（Pit）の追求



⑲

・ 住居址の溝を追求する
調査員（太田）





㉔

- ・ AJ2 - II 層の土器
出土状況
- ☆箸の立っている場所
は骨類の出土位置



㉕



- ・骨片の出土

㉖

- ・大洞A式の壺形
土器の出土状況



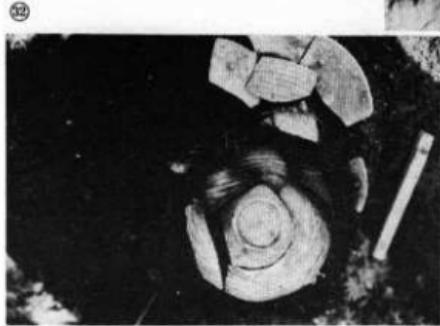
㉗



- ・皿形土器の出土状況



・皿形土器の出土状況



・台付鉢形土器の
出土状況



・壺形土器の
出土状況



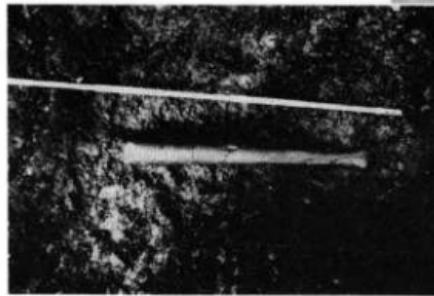
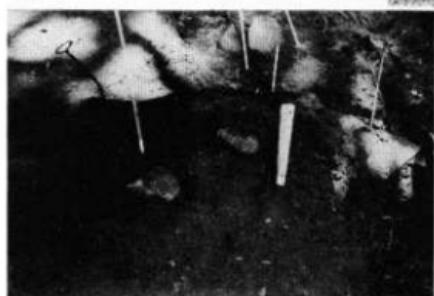
・台付鉢形土器の
出土状況



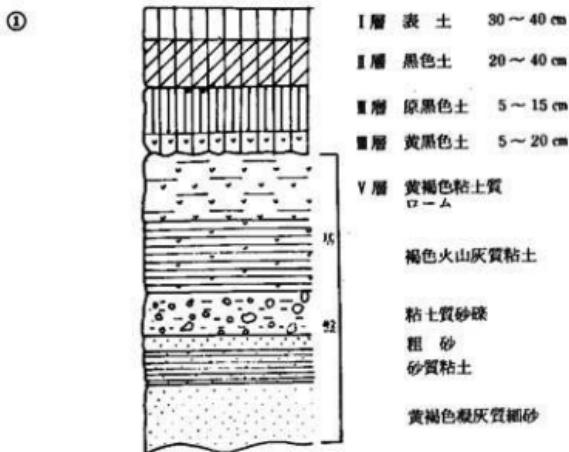
・壺形土器の
出土状況



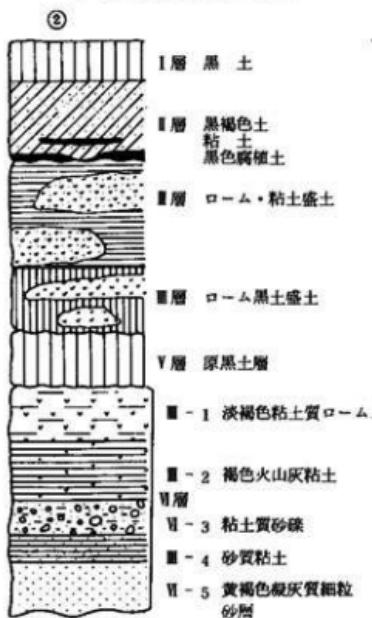
・皿形土器の出土状況



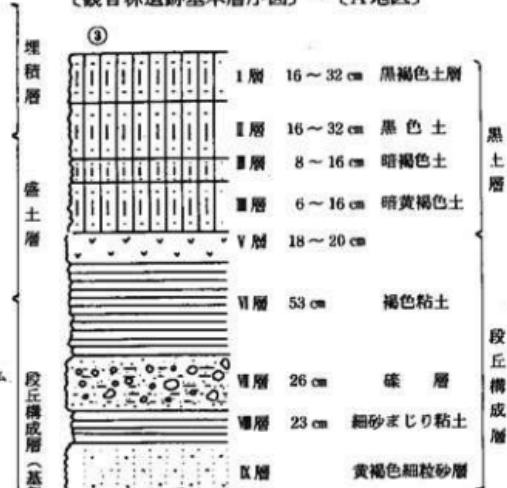
〔第4図〕銀音林遺跡基本層序図〔C地区基本層序〕



〔D地区瘤状造構基本層序〕

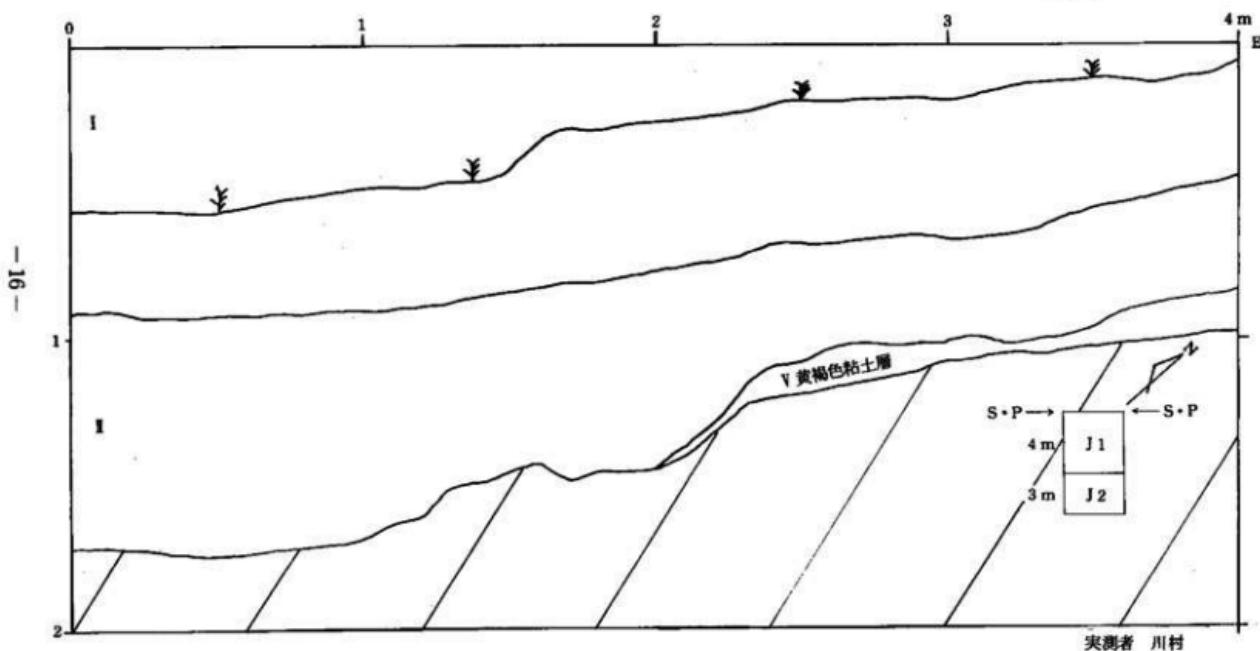


〔銀音林遺跡基本層序図〕—〔A地区〕



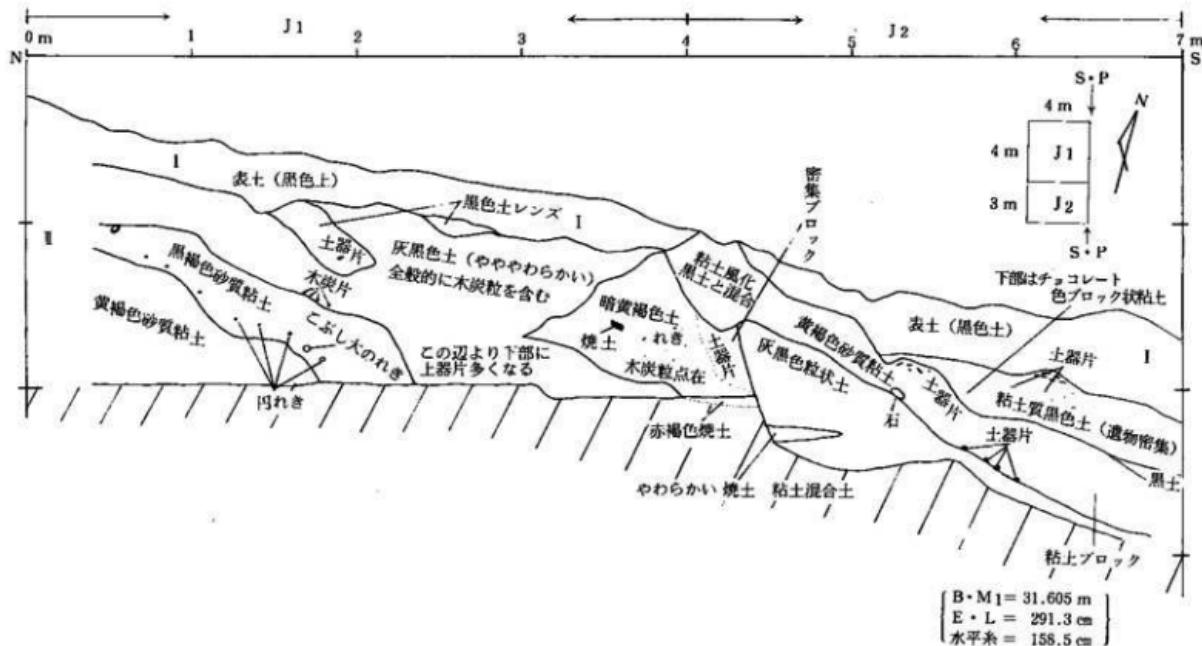
〔第5図〕A地区J1グリット北壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$

$B + M1 = 31.605\text{ m}$
 $E - L = 291.3\text{ cm}$
水平糸 = 158.5 cm

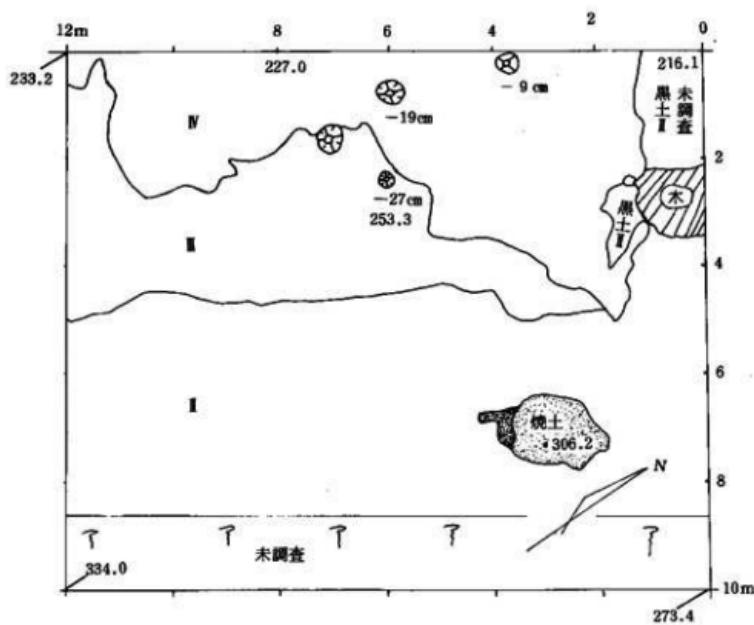


〔第6図〕A地区 J1-J2グリット東壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$

実測者 川村・山田・小山



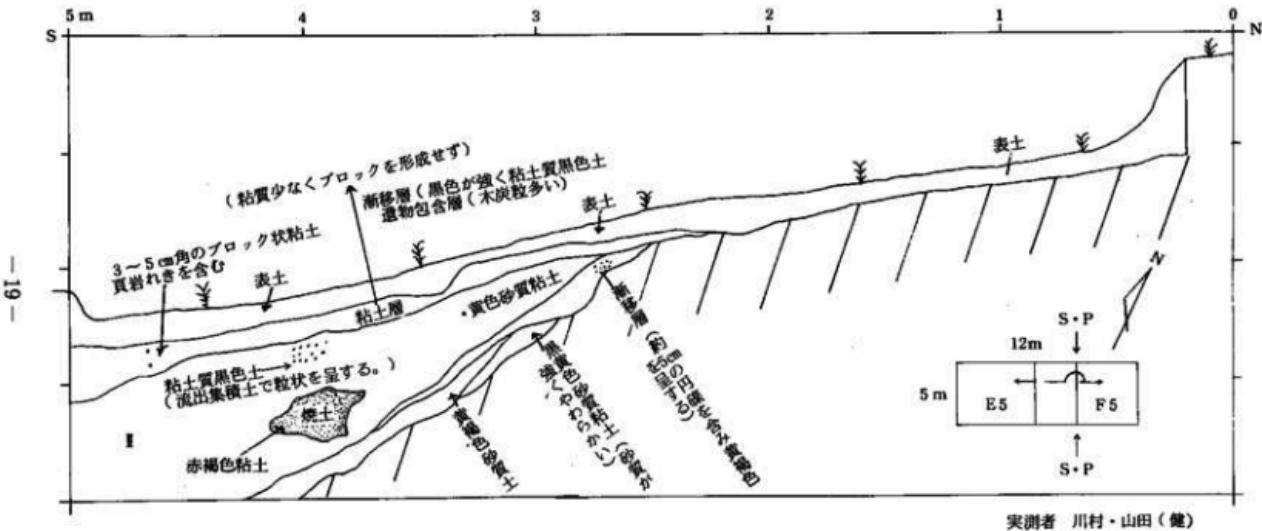
〔第7図〕 A地区E5 F5 グリット平面図 $S = \frac{1}{40}$



$(B + M_6 = 32.113 \text{ m})$ 実測者 川村・山田(健)

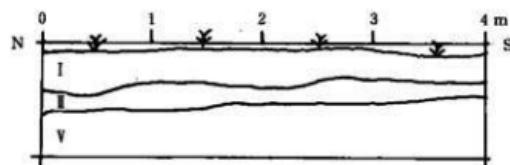
〔第8図〕A地区F5グリット、西壁セクション図 $S = \frac{1}{10}$

$$\left\{ \begin{array}{l} B \cdot M6 = 32.113 \text{ m} \\ E \cdot L = 98.6 \text{ cm} \\ \text{水平系} = 167.2 \text{ cm} \end{array} \right.$$

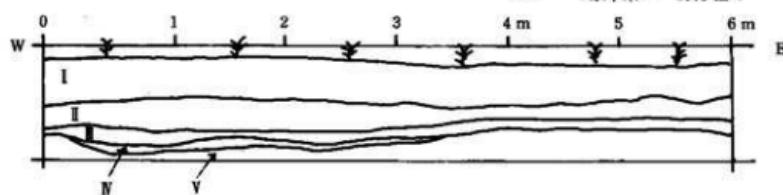


〔第9図〕 C地区BグリットD1・E1・区セクション図

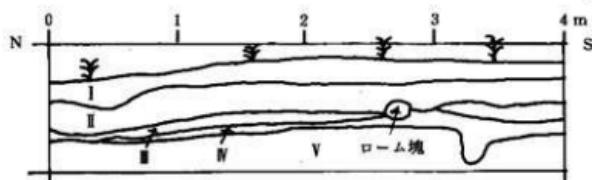
①〔C地区BグリットD1区東壁セクション図〕 $S = \frac{1}{20}$ $\left\{ \begin{array}{l} B + M = 33.283 \text{ m} \\ E + L3 = 70.2 \text{ cm} \\ \text{水平糸} = 92.5 \text{ cm} \end{array} \right.$



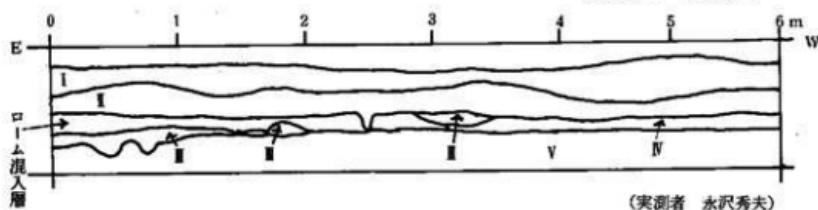
②〔C地区BグリットD1区北壁セクション図〕 $S = \frac{1}{20}$ $\left\{ \begin{array}{l} B + M = 33.283 \text{ m} \\ E + L3 = 70.2 \text{ cm} \\ \text{水平糸} = 85.5 \text{ cm} \end{array} \right.$



③〔C地区BグリットE1区東壁セクション図〕 $S = \frac{1}{20}$ $\left\{ \begin{array}{l} B + M3 = 33.283 \text{ m} \\ E + L = 70.2 \text{ cm} \\ \text{水平糸} = 78.5 \text{ cm} \end{array} \right.$



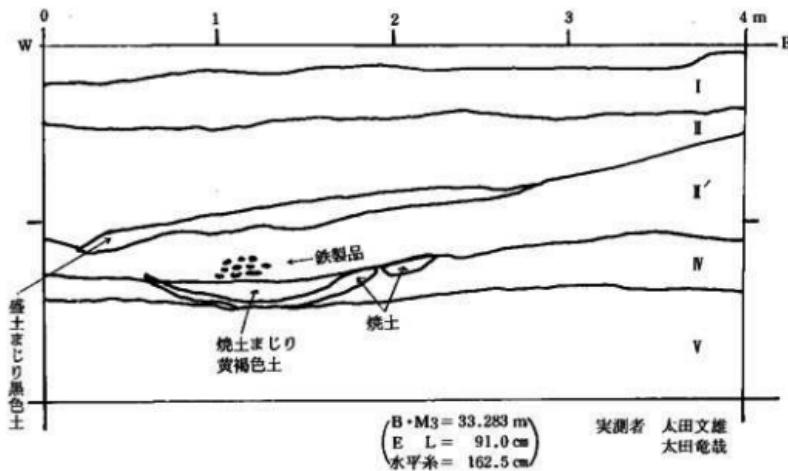
④〔C地区BグリットE1区南壁セクション図〕 $S = \frac{1}{20}$ $\left\{ \begin{array}{l} B + M3 = 33.283 \text{ m} \\ E + L = 70.2 \text{ cm} \\ \text{水平糸} = 74.0 \text{ cm} \end{array} \right.$



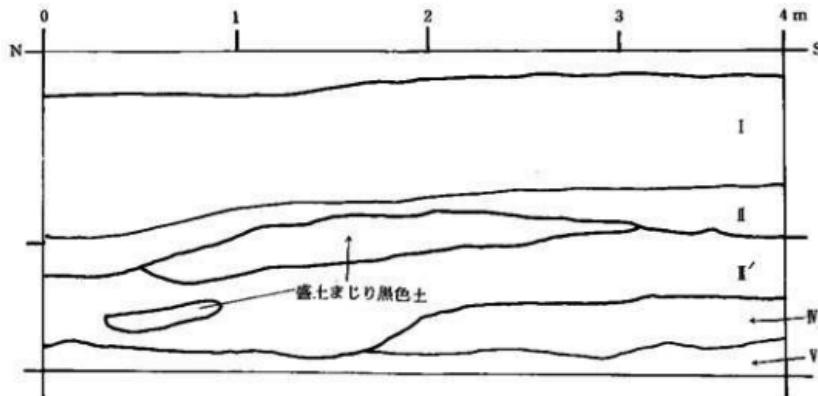
(実測者 永沢秀夫)

〔第10図〕 C地区X1グリットセクション図

① [C地区X1グリット北壁セクション図] $S = \frac{1}{20}$

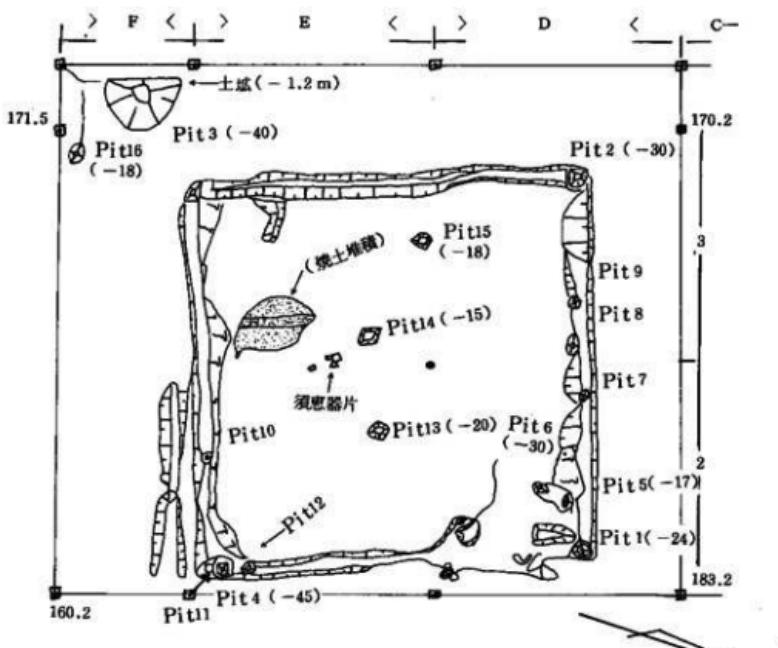


② [C地区X1グリット東壁セクション図] $S = \frac{1}{20}$



(第11図) C地区Bグリット検出、二号住居址 $S = \frac{1}{50}$

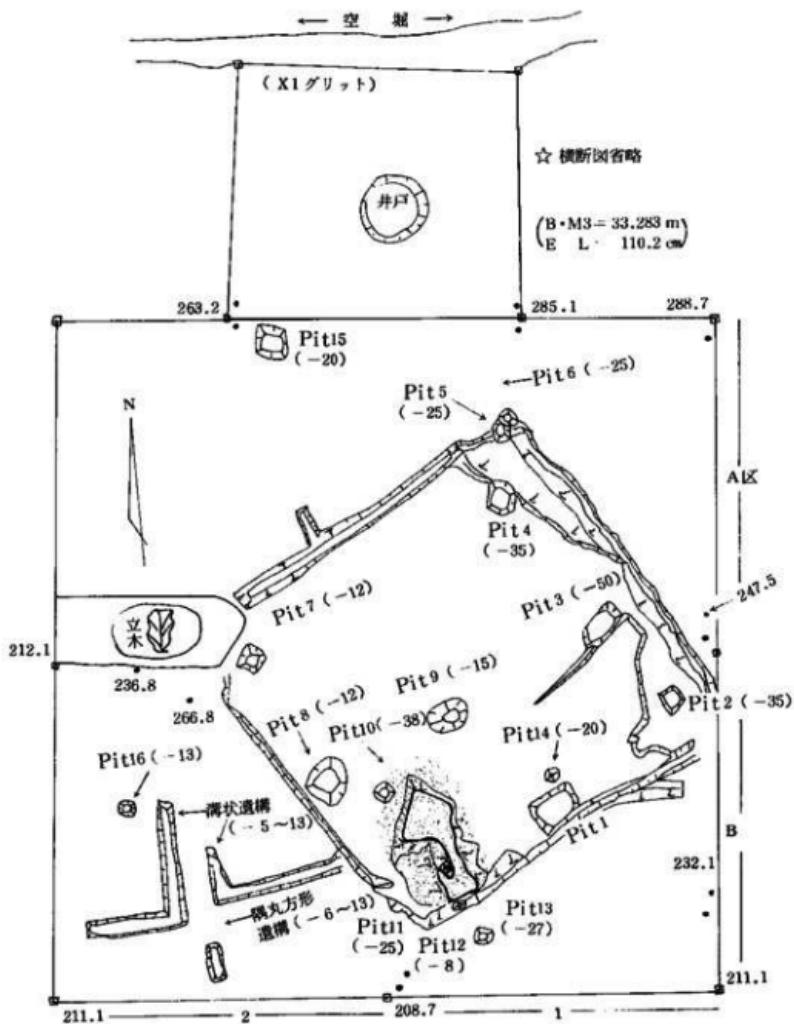
平板実測
北川智章
(B+M3 = 33.283 m)
E L = 110.2 cm



(注) 横断図省略

(第12図) C地区A グリット検出、一号住居址 $S = \frac{1}{50}$

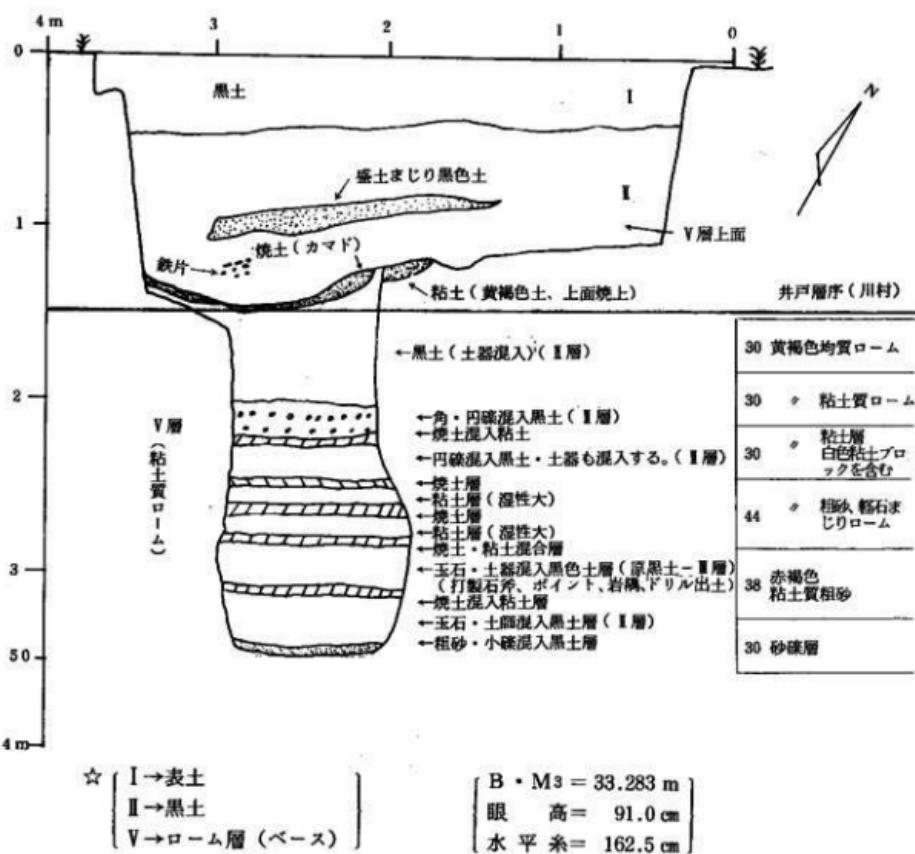
平板実測
北川哲章



〔第13図〕 C地区X1グリット検出、井戸断面図付同層序図（再掲）

$$S = \frac{1}{20}$$

実測者
太田 文雄
太田 電成



〔I〕 調査の経過と発掘要項

(1) 第五次発掘調査に至るまでの経過

- 観音林遺跡は、昭和49年度に第一次試掘調査が行なわれ、わずか $5\text{m} \times 5\text{m}$ の試掘区（A地区）から、縄文時代晚期の土器群が大量に出土した。
これらの土器は、大洞C2式土器が主体で当遺跡が縄文時代晚期の一大遺跡であることが判明した。
 - ・その後、昭和58年度になって、地主である長尾良治氏の御好意により、近い将来において開発計画があることの連絡があったため、五所川原市教育委員会では、発掘調査の計画を策定し、第二次発掘調査を実施した。
 - ・第二次発掘調査は、遺跡の所在する舌状台地を、A地区（南斜面）、B地区（遺跡の東部）、C地区（遺跡の北部）、D地区（堀状遺構）、中央区（台地の中央部）の各区に分け、A地区、B地区、C地区およびD地区の側辺を調査区として選定し発掘調査した。
すなわち、遺跡の中央部を残し、東・南・北の三側辺を調査することにした。

- 第二次発掘調査では延べ 163.8m^2 を発掘したのであるが、第二次調査における各地区的状況を簡略に述べる。

〔A地区〕 →この地区は、縄文時代晚期の遺物が出土する地区である。出土土器は大洞C2式土器を中心に、晚期B・C、C1、C2、A式土器が出土した。

〔B地区〕 →この地区では、土塙群が出土した。土塙群のうち1基は縄文時代晚期のもので、他の8基は縄文時代後期のものである。

これらの土塙内外から獸骨片（ニホンシカ・イノシシ等）や鳥骨（ガンカモ）が出土し、いずれも焼骨であることが注目される。

〔C地区〕 →この地区からは、カマド址が検出され、さらに住居址壁面の一部が出土した。すなわち、この地区では、「東北北部の土師器型式」第二型式の土師器を伴う歴史時代（平安期）の遺構が出土した地区である。

〔D地区〕 →この地区は、既述したように、空堀の状態を調査するための地区である。

D地区では、D1トレンチを一本（ $1\text{m} \times 12\text{m}$ ）堀を切って東西に掘る、その結果堀の形態が特異なため、明年度さらにトレンチを入れ確認することにする。

以上が第二次調査の概要である。

●第三次調査は、昭和59年に252 m²を発掘調査した。その概要を述べるとつぎのとおりである。

〔A地区〕→この地区は、第一次・第二次・第三次調査をとおして縄文時代晚期の遺物が多量に出土する。第三次調査においても同様であるが包含層が約3mもあって、これだけの厚さを持つ包含層がある以上、台地上の平地に縄文時代晚期の住居址が存在する可能性が予測される。

〔B地区〕→ここでは、小土塁に囲まれた5角形に近い遺構が出土した。この土塁は、第二次調査の項で述べた土塙群を囲んで出土した。また土師器が出土する小土塙1基を検出する。

〔C地区〕→この地区では、第二次調査を検出した、カマドを備えた一号住居址（平安時代後葉）の西半分を発掘するも、Ⅰ・Ⅱ層が深く、東半分は明年度に発掘することにする。

〔D地区〕→さきに述べたとおり、D1トレンチによる堀の形態が特異であったため、D2～D5のトレンチを4本南北、東西に堀を横切って1m×12として掘る。

その結果を検討すると親音林遺跡に所在する空掘は、箱型掘りであると結論づけた。

●第四次発掘調査は、昭和60年度に実施、発掘面積は212 m²である。

第一次～第四次調査は予備調査で第四次は予備調査としての最終段階である。

〔A地区〕→さきに述べたとおり、この地区は南斜面で遺跡の中央南端に位置する。包含層は深く、第四次調査では、約1mの深さまで発掘した。（Ⅰ・Ⅱ層→表土、黒土の上半）

このⅡ層の黒土は、二次堆積層であるが、縄文時代前期・中期・後期・晚期、土師器、須恵器が混在する。

すなわち、晚期のものが層序の下位に、後期のものが上位に多く、さらに土師器・須恵器、前、中期の土器が混入する状態である。

しかしながら、主体を占めるものは、縄文時代晚期大洞C2式土器である。（正常な土層では、古いものは下位に、新しいものは上層に包含するのが普通である。）

このことから、台地の中央部は平坦地をなしており、台地中央部を削平して、その黒土を南斜面・北斜面に二次的に移動させたこと、および遺跡の南端は急斜面をなしていたこ

とによるものと考えられる。このことは、C地区の層序からも推定でき、中央部に黒土層が殆んどなく、V層に30~40cmの深さで達することからも裏付けられる。

〔C地区〕→この地区では、歴史時代の井戸を1基、3号住居址のカマドと壁面の一部、および、2号住居址の柱穴と溝状遺構を検出したが完掘せず。

〔中央区〕→予備調査の最終年度として中央区の一部を発掘した。すなわち、AN1トレンチ、SA1、SB1トレンチである。(2m×10m)

また、舌状台地の中央部に南から北へ、T・P1、TP2、TP3(2m×2m)を設定発掘した。

その結果、SA1、SB1は遺物の出土はなく、AN1トレンチは、縄文時代後期の遺物が多量に出土することが確認された。

また、T・P3において遺構が存在することが確認できたのである。

●第五次発掘調査は、以上第一次~第四次調査の予備調査を受けて、本格的な調査の第一年次である。五所川原市教育委員会では、この本調査を昭和63年まで続ける計画であるが、3ヶ年では全面調査は無理であろう。本年度の発掘調査についてはつぎに述べる。

(2) 第五次発掘調査

①調査要項

- ・調査目的→個人の私有地内に所在する観音林遺跡が所有者の開畠計画によって消滅する恐れがあるため事前に発掘調査を行ない、遺跡の記録保存を目的とする緊急発掘調査である。

- ・調査期間 昭和61年7月16日~8月2日

- ・整理期間 昭和61年9月1日~昭和62年3月20日

- ・遺跡名 観音林遺跡

- ・所在地 青森県五所川原市大字松野木字花笠81番地

- ・調査面積 計406m²

A 地 区	{ E 5 F 5, 5 m × 12m = 60m ² J 1 × J 2 × 4 m × 9 m } 96m ²
C 地 区	{ C A 10m × 10m = 100 m ² C B 10m × 10m = 100 m ² } 200 m ²
A N 2 地 区	A N 2 10m × 10m = 100 m ²
A N 3 地 区	A N 3 1 m × 10m = 10m ²

☆発掘主体者 五所川原市教育委員会

代表 教育長 高橋 清徳

☆主 管 課 五所川原市教育委員会社会教育課

- 課長 寺田 勇
- 課長補佐 時田 武則
- 係長 中村 健
- 主任 斎藤 誠
- 主事 船水 寛
- 夕高橋 夕紀子

歴史民俗資料館

- 主事 佐藤 文孝
- 五所川原市都市建設課
- 技師 北川 智章

☆発掘担当者 日本考古学協会々員

新谷 雄藏

☆地学担当 日本地学教育研究会々員

川村 真一

☆土器復原担当 金木町立金木小学校長 浅木 全一

☆調査員 北奥文化研究会々員 小山 英治

- 夕 太田 文雄
- 夕 長沢 秀夫
- 夕 岩崎 繁芳
- 夕 桜井 有一
- 夕 山川 夏子
- 夕 小野 雅史

☆調査補助員 五所川原商業高等学校 横沢 一恵

青森高校生 山田 健一

☆作業員

長尾 秀幸・小笠原 正男・長内 義光・長尾 義雄・長尾 稔三・仙庭 春代
長尾 たみ・長内 和・小笠原きぬ・長尾由比子・長尾 繼子・小笠原喜美子

①グリット・トレントの設定（第2・3図）

本年度の発掘調査は、本格的調査の第一年目である。すなわち、本格的発掘調査は、本年度より三ヶ年計画として立案されている。

そのため、第一～第四次調査にわたる予備調査の結果について再検討を加え、あわせて疑問として残った問題点を解明する必要があったのである。

いま一つは、予備調査においては、意識的に台地中央部をさけ、北・東・南の三方向より遺跡の周辺地区を調査の対象として発掘をすゝめて来たのであるが、本年度からは遺跡の中心部に発掘区を設ける手がかりを把握する必要があったのである。

すなわち、第一～四次調査の総括と、本格調査への第一年度としての発掘区を選定する必要があった。

以上の意図を持って、グリット、トレント等を設定した。

以下に本年度のグリット・トレントの配置について述べる。

〔A地区〕（第2・3図参照）

この地区は、舌状台地の中央部南端に位置する地区で、遺跡の南端の南斜面にあり、第一次の試掘調査以来、本年度まで継続的に発掘調査をつづけてきた地区である。

すなわち、G・H・I・J・Kの各グリットであるが、本年度はJ・Kの2地区を対象とした。

●Jグリットは、東西4m、南北9mで、北方よりJx(4m×2m)、J1(4m×4m)、J2(4m×3m)の各グリットに分け発掘した。

このうち、J1・J2グリットは、昨年度も発掘したのであるが包含層が厚く、深さ1mで発掘を中止したグリットで、本年度も継続して発掘したグリットである。

●Kグリットは、Jグリットの東側に設定したグリットである。東西4m、南北8mで北方よりK1・K2グリットと分けて発掘を進めることにした。

☆このA地区は斜面であるが、主として晩期の土器群・および後期初頭の土器群が出土する地区である。

〔B地区〕

この地区は、舌状台地の東側、空堀の西に設定した地区であるが、本年度は発掘せず、第二次発掘調査において後期初頭の土塙群が出土し、第三次では、小土塙を検出した地区である。

〔C地区〕

●CAグリット

この地区は、本遺跡の北側、空堀に接する地区である。この地区も第二次調査より継続して調査した地区である。

第二次調査では、焼土の広がりと竪穴住居址の壁面と思われる遺構を検出、第三次調査では、1号住居址の一部を検出した。また、第四次調査では、1号住居址の一部をさらに検出した。本年度は、この住居址を完掘する目的で、既に発掘したトレンチ、グリットを含め、東西10m、南北10mのグリットを設定し、C地区Aグリットとした。

さらに、このグリットを東西、南北にそれぞれ5mとし、北より南へA区、B区に分け、東より西へ1・2と番号を付した。すなわちA1区、A2区、B1～B2区と区分して発掘をするため。

●CX1グリット

このグリットは、既述のCAグリットに接し、北方の堀との間に東西4m南北4mとして設定した。（第3図参照）

このグリットは、1号住居址を追求する第四次調査で、井戸を1基検出したが完掘せずその完掘と地層の再調査を目的として設定したものである。

●CBグリット

このC地区Bグリットは、第四次調査において2号住居址の四周の溝の一部と柱穴を四つ四隅に検出したため、その完掘を目的として設定したものである。

〔D地区〕

このD地区としたものは、觀音林遺跡を囲むように東・北・西につづく空堀を調査する目的で第二次～第四次調査にわたって調査した地区で、トレンチを1m×12mとし、D1～D7の7本を掘り調査した地区であるが本年度は調査対象とはしなかった。

〔AN1・SA1・SB1地区〕

この地区は、觀音林遺跡の北東端、を調査する目的でAN1を、また同じく南東端を調査する目的でSA1を、さらにA地区の東南地区を調査する目的でSB1トレンチを設定し第四次調査において発掘したのであるが、次の結果を得た。

●AN1 → 東西10m, 南北2m → このトレンチでは、縄文時代後期「十腰内I式」土器が主として出土する。

●SA1, SB1 → SA1は東西10m, 南北2m, SB1は南北2m, 東西10mとして設定したが、この両トレンチでは、I層がうすく、II・III層が無いことがわかった。

すなわち、觀音林遺跡の東南部の範囲が次第に明らかになったのである。

そのため、第五次では調査対象とはしなかったのであるが、AN1地区は残った地区として、発掘対象にする必要がある。

〔T・P1・T・P2・T・P3地区〕

このT・P1～3は、台地中央部を南北に縦断するように、2m×2mの小区を設定したものである。すなわちT・P1・T・P2・T・P3とした。このT・P1～3は第四次発掘調査で設定し発掘したのであるが、T・P1・T・P2では、I・IV・V層で包含層は無い。しかしT・P3では遺構の存在を認めることができた。

〔AN2地区〕

既述のT・P3において遺構の存在を認めたので第五次調査では、この第四次調査におけるT・P3を中心に東西10m, 南北10mのAN2グリットを設定し発掘した。

このグリットでは、土塙群の一部を検出したが完掘の日数が無く第六次発掘調査に期待することにする。

以上、第一次～第五次にわたって発掘調査したグリットの設定について概略述べてきたのであるが幾つかの問題点が残されている。

[Ⅱ] 地形・層序（第1, 2, 4～10図）

(1) 地 形

本遺跡は、五所川原市の東方約5km、松野木部落の南端にあって、五所川原駅前より弘南バスにて約20分、南松野木バス停留所下車、約10分の西方舌状台地上に位置する。

この台地は、最も高い地点で標高約33,283m（B・M3）であって西南方向に突出する台地である。

この地域には、松野木川が県道福山・五所川原線を横切っており、この周辺には、長者森山・境山・鶴野等の遺跡が梵珠山系の山麓に点在している。

松野木地区の地形を大きく分けると、東方から西方へ向って、中山山脈の南端を占める梵珠山地（標高500～300m）、それに続く大釧遊丘陵（標高200～100m）、前田野目台地（標高70～30m）および津軽平野の四つに区分することができる。

この松野木台地は、既述の前田野目台地上に位置しており、北は天神川、南は松野木川によって挟まれた部分を占めている。

前田野目台地は、海成段丘で津軽平野の東縁に原子・野里・松野木・飯詰と連続して分布しており、この台地を梵珠山地に源をもつ小河川が浸食によって谷をつくり寸断している。この開析谷には境ノ沢溜池・長橋溜池など多くの溜池がつくられている。

前田野目台地は面高度によって3面に細分ができる。すなわち、標高50～70mのⅠ面、30～40mのⅡ面、20～30mのⅢ面に分けられる。松野木地区は、このⅡ面上にある。

観音林遺跡は、この松野木台地の南西端部にある。この台地は、その北側を流れる松野木川の浸食によって舌状台地となっており、標高は25～30mを示しⅢ面に連続している。

遺跡の南方一帯は小規模ながら松野木川および、その支流の形成した扇状地となっている。

なお、遺跡の北側約0.3km付近を西流する松野木川は、津軽平野を北流して十川と合流するが、一部は境ノ沢溜池に注いでいる。

(2) 地質および層序（第4図）

本遺跡の基本層序は第4図（C・D・A）に示すとおりである。

遺跡のベースをなすのは、Ⅴ層のローム層で、遺物の包含層はⅢ～Ⅳ層である。

Ⅳ～Ⅰ層までは段丘の構成層で遺物の出土とは直接的には関係ないが、遺跡内で発見さ

れた歴史時代のものと考えられる空掘の構造との関係から特に記載することにした。なお、この段丘の基盤をなすのはⅩ層の凝灰質細粒砂層である。以下に各層の特徴を述べる。

☆層序（第4図-①～③）

- I層・黒褐色を呈しており、草木根が多数混入する腐植土で表土を形成する。
- II層・黒色土で粒子が細かく、さらさらしており直径1mm程度の粗砂を混入する。
- III層・黒色土に粘土が混入したもので、細砂を含み粘性がある。暗黄褐色を呈する。
- IV層・ローム層から黒土への漸移層で粘性が強く、暗黄褐色を呈する。
- V層・粘性の強い黒褐色均質ロームで、まれに石英粒がみられる。
- VI層・黄褐色で粘性の強い粘土である。
- VII層・粘土・砂および直径数cm程度の主に亜角礫層で段丘礫である。
- VIII層・凝灰質細砂まじりの粘土で下層数cmはオレンジ色を呈する。
- IX層・遺跡をのせる段丘の基盤をなす層で黄褐色凝灰質細粒砂層である。

以上が、当観音林遺跡における基本層序であるが、前回の調査（第四次）では、C地区C2グリットの発掘調査において得た観察の結果、基本的に既述の層序と同様なるも、C地区における基本層序図（第4図）に掲げることにする。

☆C地区基本層序（第4図-①）

- I層・表土で草木根が多数混入する腐植土である。
- II層・黒色土で粒子が細かく、さらさらしており、直径1mm程度の粗砂を混入しており、前記のII層と同様である。
- III層・原黒色土である。粒子が細かく、粗砂も混入することは、II層と同質であるが、しまりがあり、粘質もややある。
- IV層・黄黒色土で、V層の粘土質ロームも混入しており、III層からV層へうつる漸移層である。
- V層・黄褐色粘土質ロームである。均質ロームで粘性も大である。

以深は、本台地の基盤をなす層で、第4図-②に同じである。当遺跡は、この層序のI～III層に遺物が含まれているが、特にII・III層が濃密である。また、検出された遺構は、いずれもV層を掘りこんでいるものであった。このV層以深は、本舌状台地の基盤をなす層（V～IX層）であって、既述したとおり堀状遺構との関係からV～IX層を基本層序として示した。

〔Ⅲ〕 出土遺構（第7・11・12・13図）

（1）第一～第四次発掘調査で出土した遺構

この項では、第五次発掘調査に至るまでの第一～第四次発掘調査において検出した遺構について、その概要を述べることにする。

☆〔Ⅱ〕と重複する点は許容されたい。

●第一次発掘調査→A地区T・P（S49）

この調査では、土偶・ミニチュア土器を埋蔵した小土塙と、焼土遺構および、堅果類を内蔵した壺形土器を検出した。

出土した土偶は、大洞C2式の腕を組んで坐った土偶で出土例の少ないものであり、共伴したミニチュア土器の中には、ひしゃく形の土製品も出土した。

また、堅果類を内蔵した大洞A式の壺形土器は、焼土の中から出土したもので、テク抜き手法の存在を疑わせるものであった。

●第二次発掘調査（S58）では、C地区において焼土の堆積を検出、平安期の住居址の存在を確認できた。

また、B地区では、後期十腰内I式期の土塙群（6基）と、大洞A式期の土塙1基が検出され、他に時期不明の土塙2基、計9基を検出する。

また、D地区（空堀）において、D1トレンチを設定、空堀の形態を追求する。この堀の形態に特異性を認めたので、次年度に再調査の上検証することにする。

●第三次発掘調査（S59）では、B地区において小土塙を検出、この小土塙は五角形に近い形態であり、昨年検出の土塙群の上層において検出され、歴史時代のものと推定される。

また、C地区Aグリットにおいて、1号住居址の西半分を検出する。さらにD地区では、D2～D5トレンチを掘り、堀の形態を検討した結果、箱形堀の形態であることをほぼ確認できた。

●第四次調査（S60）では、C地区Aグリットにおいて、1号住居址の西半分の一部を掘り、X1グリットでは、歴史時代の井戸遺構を検出、また、C地区Bグリットにおいて、2号住居址の存在を確認できた。

さらにA地区では、第二～第四次調査において縄文晩期の土器群のうち大洞B・C～A式の土器、約100個体と、焼土の堆積遺構を検出してきた。

以上が第一～第四次調査において検出した遺構の概要である。

(2) 第五次発掘調査で出土した遺構 (第2・7・11・12・13図)

④ 1号住居址 (第12図) → この住居址は、第二次発掘調査以来、覆土が深いため、第三・第四・第五次発掘調査と継続して発掘してきたのであるが、今回ようやく完掘したものである。

この住居址は、C地区AグリットのⅢ層下で確認したもので、Ⅴ層を掘り込んでいたものである。(なおこの地区にはⅢ層の黒土およびⅣ層はなかった。)

この1号住居址は、南向きのカマドを備えたもので、そのプランは(第12図)に示すとおり、ほぼ方形の平面プランを有する竪穴住居址である。1辺約5.5mの方形プランであるが柱穴は、四隅に存在し、(pit 2・4・7)が主柱穴と思われるが他の一つは検出不能であった。

この住居址の西側にはカギ形の溝状遺構があり、その南側に浅い隅丸方形の遺構も検出したが、その機能等は不明である。

この1号住居址は、壁面一溝一床面となるのであるが床面が一段高くなっている、床面の貼り付け粘土が二枚認められることから、一度廃屋となり再び建てられたもののように観察された。

なお、この住居址のカマドの袖に密着して斜位の状態で出土した壺形土師器は、「東北部の土師器型式第二型式の新しいもので、小生は、平安時代中期以降のものと考えている。

なお、この壺形土師器は、第三次発掘調査報告書P31に示してある。

⑤ 2号住居址 (第11図)

この2号住居址は、第四次発掘調査で確認したものである。

この2号住居址は、C地区BグリットのⅤ層上面で検出したものである。このBグリットでは、Ⅲ層がわずかに残り、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ層の層序を示し、表面より約40cmの深さで検出したものである。

この2号住居址も方形プランのもので四隅に溝を備えており、一辺5mの大きさである。

この2号住居址にはカマドの検出ではなく、地床炉があった。この炉は、浅いクボミになっており、焼土が約10～18cm高く堆積していたものである。また、この焼土内より土師器

片が出土した。この土師器片も2号住居址の年代を知る資料になるよう思う。

このものも四隅に主柱穴（pit 1・2・3・4）中央にpit 13・14が存在したが、この住居址の床面も、貼り付け粘土が2面になっており、二度の建て替えが認められるところである。

柱穴の配置が、建て替えを裏付けるものであろう。

また、この住居址の入り口は溝が切れている北東隅にあったものと考えられる。

なお、この住居址の床面に密着して変形須恵器が出土した。（P・L 45-570）この須恵器片も2号住居址の年代を知る手がかりとなるものようである。このことについては考察の項で再び述べることにする。

◎その他の遺構（第7・13図）

●その他検出した遺構は、A地区E5 F5 グリットにおいて柱穴と、焼土を検出したがその性格等は不明であった。層序が、表土—Ⅳ—Ⅲ—Ⅱ層と逆順となっていたのに疑問が残った。次年度解明したいと考える。

●また、C地区X1 グリット（第13図）において、井戸を検出したことは、既述したのであるが、今回はその層序を調査し明らかにした。

調査結果の層序については、（第13図）に示したとおりである。

●さらに今回は、AN2 グリットにおいて、地表下約30～40cmにおいて縄文晩期の土塙群を検出した。

すなわち、Ⅰ層・Ⅱ層はうすく、Ⅲ層はこの地区でも存在せず、Ⅴ層上面で5基の土塙を認めたが、明年度に残すこととした。

以上が第五次調査で検出した遺構である。

〔表1〕

觀音林遺跡出土、土器・土製品編年表

(縦文時代編年表を含む)

推定年代	区分	土器型式	觀音林第一次 S49試掘	觀音林第二次 S58	觀音林第三次 S59	觀音林第四次 S60	觀音林第五次 S61	主な遺跡
13000 ~ 6000	草創期 早期	省略	/	/	/	- /	/	・鶴ヶ沢町 鳴戸遺跡
5000	前期	a b c d1 d2 出 凹 筒 下 層 式	/	/	円筒下層式 a式 d2式	円筒下層式 1.a式 2.d1式	円筒下層式 ①a式 d式	・五所川原市 原子A遺跡
4000	中期	a b c d1 d2 e 円 筒 上 層 式	/	円筒上層式 b式	円筒上層式 d2式	円筒上層式 3.b式	円筒上層式 ②(+)	・深沢町 一本松遺跡 ・五所川原市 原子B遺跡
3000	後期	I II 十 腹 内 式 III IV V VI 大 洞 式 B C C1 C2 A A'	十腹内I式	十腹内式 I式 II式 V式	十腹内式 I式 II式	十腹内式 4.I式 5.II式 ☆第四群土器 ⑥I式	⑨十腹内式 ④I式 ☆第四群土器 ⑥I式	・五所川原市 原子B遺跡 ・觀音林遺跡
2000	晚期	B B+C C1 C2 A A'	大洞式 大洞式 B+C式 C1式 C2式 A式	大洞式 B+C式 C1式 C2式 A式	大洞式 B+C式 C1式 C2式 A式	大洞式 6.B+C式 7.C1式 8.C2式 9.A式	大洞式 ④B+C式 ⑦C1式 ⑧C2式 ⑨A式	・木造町 丸ヶ岡遺跡 ・市浦村 五月女忍 遺跡 ・觀音林遺跡
300 ~ A-D300	出生	省略	/	/	/	/	/	・五所川原市 山道遺跡
800	歴史時代	七輪器 第一型式 第二型式 須恵器	土師器 ・第二型式 ・須恵器	土師器 ・第二型式 ・須恵器 ・珠州焼	土師器 ・第二型式 ・須恵器 11.須恵器 ・鐵器片	土師器 10.第二型式 11.須恵器 ・陶器	・土師器 ・須恵器 10.第二型式 11.須恵器 ・陶器 ・鐵器片	・五所川原市 前田野目 遺跡 持子沢遺跡
備考		※他に骨類、鉄製品の出土あり。(①~⑩は土器の群別である。						

資料 No.	(第5次) 観音林遺跡出土骨類鑑定表	
	出土区・層	
1	(ローム内) AK2-II	小骨片(焼骨)のみ シカなどの骨片であろう。
2	CB-D2-II下	焼骨片のみ シカの種子骨かと思われるもの1点を含む。
3	(ローム内) AK1-II下	微小骨片のみ
4	CA-B1-II下	大型獣の手根骨かと思われる。
5	(焼土内) AK1-II下	焼骨片のみ 大型獣のものであろう。
6	(西壁下) AJ1-II下	カモ類、左脛骨遠位端、その他焼けた首片がある。 ノウサギ、右距骨
7	(北壁下) AJ2-II下	イノシシ、後臼歯片、M2 M3、咬耗は進まず、萌出直後位の歯である。生後3年位か。 鳥のようなうすい骨がある。他に獣首小片が多い。
8	(ローム上) AK1-II上	微小焼骨骨片
9	(ローム上) AK2-II上	イノシシ、基節骨の破片 近位骨端のはずれているもので、若い個体であろう。
10	(ローム上) AK2-II上	上記の骨の一部と思われる。 骨質等よく似ている。
11	(C2鉢内) AK2-II下	軽石片
12	(A式四脚壺内) CA-B1-II中	微小焼骨片
13	(C1式鉢内) AJ1-II中	焼けた小骨片 ノウサギ位の小獣片である。
14	(A式壺内) CA-A1-II	焼けた小骨片 頭骨の一部かと思われるが詳細は不明。獣首であろう。
15	(C2式壺) AF5-II下	・コン虫? 昆虫羽と灰もしくは粘土小塊と木炭小片
	備考 1	(例) A地区・C地区=A・C, A地区→Jx, J1・J2・K1・K2グリット C々々→Aグリット, Bグリット、(それぞれA・B, C・D・E・F) 区が1区・2区に分けられる。
	タク2	☆骨類は、すべて晩期大洞C2・A式土器に伴うものである。このうち、K1・K2・J2は大洞A式、A・J1・CA・CBは大洞C2式土器が主体であった。但しNo.13はC1式である。

[IV] 出土遺物 (A・P・L1～65, P・L1～46, S・P・L1～20, B・P・L1～5)

(1) 土器・土製品

①土製品 (A・P・L1～5)

土製品としたものは、(A・P・L1～5)に示したとおりであるが、この土製品を縄文時代晚期のもの、後期のものに大別して述べることにする。

②晚期の土製品

①土偶頭部 (A地区K1グリットⅡ層上出土) (註) →以後AK1Ⅱ上と略記する。— (A・P・L4—⑩)

②スタンプ形頭部を持つ棒状土製品 (AJ2Ⅱ, A・P・L3—⑨)

③リング状土製品 (AJ1Ⅱ下, A・P・L4—⑪)

④貫通孔のある土製品 (CB-D1区—Ⅱ, A・P・L4—⑫)

⑤ミニチュア土器 (AK1Ⅱ, A・P・L4—⑬)

⑥異形土製品 (AJ1—Ⅱ, A・P・L5—⑭)

⑦三角形土製品 (AJ1—Ⅱ, A・P・L5—⑮)

⑧後期の土製品

①人面付把手 (CB-C3—Ⅱ, A・P・L1—⑯)

②香炉形土製品 (CX1—Ⅱ, A・P・L1—⑰)

③円盤状土製品 (CA-A1—Ⅱ, A・P・L2—⑱)

④刺突文のある方形土製品 (AJ1—Ⅱ, A・P・L2—⑲)

⑤刺突文のある長方形 (現存部) 土製品 (AJ1—Ⅱ, A・P・L2—⑳)

⑥人面のある葺形土製品 (CB-D1—Ⅱ, A・P・L3—㉑)

⑦葺形土製品 (CA-A1—Ⅱ, AK1—Ⅱ, A・P・L5—㉒・㉓・㉔)

⑧鐸状土製品 (AJ1—Ⅱ, A・P・L5—㉕)

⑨土偶脚部 (AJ2—Ⅱ, A・P・L5—㉖)

⑩土偶脚部 (AN2—Ⅱ, A・P・L5—㉗)

◎中期の土製品

①土偶（下半部）（CA-A1-I, A・P・L1-⑧）

②土偶残欠（CB-D2-I, A・P・L3-⑨）

以上のように、土製品としたものは晩期のもの7、後期のもの10、中期のもの2、計19個の土製品が出土したが、中には、その性格、または用途、機能等不明なものが多いために名称等に問題が残るようである。

- このうち、人面付把手とした①のものは、深鉢形土器の把手と思われるものである。
- また、②とした香炉形土製品としたものもその下部が欠損しているため、その全体像は類例を待ちたいと考える。
- 特筆すべきは、⑩に示した晩期大洞A式期の土偶頭部である。他の晩期の土偶と比較して、まことに写実的な顔をしており、その両眼と口には、内眼で見る限りアスファルトを充填しているものであって極めてめずらしいものである。
- 他に④とした円盤状土製品、⑦とした人面のある葺形土製品等、出土数が少ないものである。

◎土器（A・P・L 6～65, P・L1～46、表I）

出土した土器は、（60×28×15cm）の箱にて約70箱の出土である。

出土量の最も多い地区は、A地区（J1・J2・K1・K2グリット）で、C地区Aグリットがつぎに多く、C地区Bグリット、AN2グリット、AN3トレーナーの順で出土量は少なくなる。

このことは、包含層の厚さにも起因するものである。

すなわち遺跡の北・南側に包含層が厚く、中央部がうすい状態であった。

出土した土器群のうち、約60%以上が晩期の土器群で、約30%が後期初頭（十腰内I・II式）の土器群、約10%程度が、前、中期、および土師器・須恵器等である。

これらの出土土器を整理・検討し、各土器群のサンプルを選定して本報告書に記したが、ほぼ第五次発掘調査において出土した土器群の全体像を報告できると考えている。

これらの土器のうち、完形、復原土器をA・P・L6～65に、代表的破片土器をP・L1～46に分け掲示した。

以下に、これらの土器について述べることにする。

なお、後期十腰内Ⅰ式土器については、少數のサンプルをとり他は割愛した。サンプルとしたものは、今後の研究に待つ問題の多いものに限定した。

これらの土器は、十腰内Ⅰ式の仲間としては疑問が残る土器群である。そのため第4群土器として第3群土器と区分して述べることにした。

〔土器の群別〕について（表1参照）

第1群土器	縄文時代前期（a・d式）
第2群土器	〃 中期（型式名不明）
第3群土器	〃 後期（十腰内Ⅰ式）
第4群土器	〃 後期（十腰内Ⅰ式以後）
第5群土器	〃 後期（十腰内Ⅱ式）
第6群土器	〃 晩期（大洞B・C式）
第7群土器	〃 晩期（大洞C1式）
第8群土器	〃 晩期（大洞C2式）
第9群土器	〃 晩期（大洞A式）
第10群土器	歴史時代、（第二型式）土師器
第11群土器	〃 ク、須恵器

◎陶器

以上の11群に分類することが可能であった。

これらの土器について、つぎに簡単に述べることにする。

なお、個々の土器等については、APL6～65、P・L1～46に述べてあるので省略する。

〔第1・2群土器〕→(P・L1-1～11)

この第1・2群土器は破片のみ約20片程度の出土である。

第1群とした土器は、縄文時代前期の円筒下層式土器で、その中にはa式、d式が含まれる。

また、第2群とした縄文時代中期のものも破片が約15片程の出土で、胸部破片のみのため、型式名は不明である。

これらの土器群は、まとまって出土するのではなく、各区で混入の状態で出土した。

〔第3・4群土器〕→(P・L2～P・L4)

このうち、第3群土器としたものは、いわゆる十腰内Ⅰ式土器、第4群土器としたものは、従来は十腰内Ⅰ式土器群として処理してきたのであるが、第四次発掘調査（昭60年）において、口頬部に「連続山型文」「連続弧状文」のある後期の土器群が出土し、それらが、十腰内Ⅰ式と同Ⅱ式の間を埋める土器群であることがわかつてきた。

そのため、第4群土器を「十腰内Ⅰ式」と「十腰内Ⅱ式」の間を埋めるものとして第4群土器としたものであるが、さらに今後追求したい土器群である。

これらの第3・4群土器は、主としてA地区J1・K1グリットのⅡ層より出土した。

また、第三次発掘では、AN1トレンチで、十腰内Ⅰ式土器が主として出土したことから当遺跡の一部に後期十腰内Ⅰ式期の生活面が所在するものと考えられる。

〔第5群土器〕→(P・L4～P・L5)

第5群土器は、「十腰内Ⅱ式」土器である。

これらのⅡ式土器群も、第3・4群土器、すなわち「十腰内Ⅰ式、それより後の土器」とともに、A地区、C地区を中心に出土したものである。

この「十腰内Ⅱ式」土器は、当津軽半島西部地区では初めてまとまって出土したものであるが未だ土器組成等は不明である。

いまのところ、口縁が大きく湾曲し、曲線文・刺突文・磨消帶をもつものと、口縁が厚く平縁で、曲線文と刺突文・磨消帶をもつものの二器形が明らかになったが完形・復原土器が出土せず詳細は不明である。

〔第6群土器〕→(P・L6-57～59)

この第6群とした土器は、わずか1箇体分のみ出土した縄文時代晚期大洞B・C式鉢形土器である。

この大B・C式土器は、他に破片が1片も出土しなかったが、第二～第四次にわたる発掘調査毎に、小破片が2～3片出土する。このことから出土数も少なく混入と考えてよいよう思う。

〔第7群土器〕→(P・L6～P・L13)

この第7群としたものは、縄文時代晚期大洞C1式土器群である。

この大洞C1式土器は、主としてA地区、C地区Aグリットを中心に出土した。

大洞C1式土器は、次のC2式・A式土器について多く出土した。

しかし、今回の発掘および第一～四次発掘をとおして、器形が鉢形・皿形土器が多く他のものは少ないことから土器の組成に欠ける器種があるようになる。

〔第8・9群土器〕→(P・L13～P・L39)

ここで述べる第8群土器は、大洞C2式土器、第9群土器は、大洞A式土器である。

このうち、第8群土器は、本遺跡の出土土器の主体をなすもので出土量が最も多い土器群である。

この8群土器の土器組成は、今まで知られているものが殆んど出土する。

すなわち、鉢・深鉢・皿・壺・浅鉢・その他である。

また、第9群土器とした大洞A式土器は、前型式の大洞C2式土器のつぎに多く出土したが、第7・8・9群土器は、A地区が最も多く出土し、C地区Aグリットがつぎに多く、他のグリットは少量の出土である。

すなわち、晩期の土器は遺跡の北・南斜面の中央部から多く出土する。

第9群土器は、今回の発掘では、特にA地区J2・K1・K2グリットで多く出土したが、J2Ⅱ層下、K1・K2Ⅱ層では完形・復原可能土器が多く出土した。

●この第9群土器の粗製土器は、第8群土器の粗製土器と区別することは、層序の乱れから不可能であった。

そのため、第8群土器（大洞C2式）-a類・b類・c類に区分し、両型式にまたがると考えられるものを分類した。

以上、観音林遺跡は、縄文時代後期、晩期を主体とする遺跡で、他に前・中期の遺物、さらに、後述する土師器・須恵器も出土する遺跡であることが次第に明らかになってきたのである。

〔第10・11群土器〕→(P・L41～P・L46)

第10群土器としたものは、土師器である。また、第11群土器としたものは、須恵器である。

土師器は、壺形・甕形土器で、須恵器は、壺形、甕形、長頸壺である。

両者とも出土数は少量である。これらの土師器は、「東北北部の土師器型式」第二型式で、須恵器も第二型式に伴うものであろう。

他に1片、陶器片が出土したが年代等は不明である。

觀音林遺跡出土・石器・石製品等一覽表〔表3〕

種別	類別	S・P・L No. 通し番	整理 No.	計測値 (cm) (長径×最大幅×器厚)	重量 (g)	石質	出土区・層位
			器種				
石器	有柄	1	1	Piech $3.22 \times 1.2 \times 0.4$	2	珪質頁岩	A J x - II
			2	$3.95 \times 1.29 \times 0.55$	1	"	A J x - II
			3	$3.83 \times 1.92 \times 0.48$	1	"	AN z - II
			4	$2.84 \times 1.22 \times 0.58$	1	"	A J x - II
			5	$3.06 \times 1.10 \times 0.62$	2	"	AK z - II
			6	$2.72 \times 1.08 \times 0.48$	2	めのう	AK z - II
			7	$5.22 \times 1.08 \times 0.53$	2	珪質頁岩	AK z - II
			8	$2.47 \times 1.12 \times 0.32$	1	"	A J z - II
			9	$2.95 \times 0.97 \times 0.56$	1	"	AK z - II
			10	Flake $2.45 \times 1.46 \times 0.38$	1	"	CB-D z - II
			11	$3.60 \times 1.82 \times 0.65$	1	"	AN z - II
			12	$3.7 \times 1.18 \times 0.42$	1	"	A J z - II
			13	$3.42 \times 1.36 \times 0.84$	2	"	CB-D z - II
			14	Flake $2.50 \times 1.22 \times 0.45$	1	"	A J x - II
			15	$3.35 \times 1.05 \times 0.42$	1	"	CB-C z - II
			16	$3.06 \times 1.51 \times 0.40$	1	めのう	CB-D z - II
			17	未完Flake $2.57 \times 2.29 \times 0.63$	2	珪質頁岩	A J z - II
			18	$2.80 \times 0.92 \times 0.36$	1	"	A J z - II 中
			19	$4.0 \times 1.48 \times 0.57$	1	"	AF s - II
			20	$4.12 \times 1.10 \times 0.75$	2	"	A J z - II 中
			21	Flake $3.95 \times 1.57 \times 0.62$	1	"	A J z - II 中
			22	Flake $2.96 \times 1.59 \times 1.69$	4	"	CA-A z - II
			23	$3.61 \times 1.28 \times 0.36$	2	"	AK z - II
			24	$2.15 \times 1.31 \times 0.35$	1	"	AK z - II
			25	$4.38 \times 1.18 \times 0.55$	1	珪質頁岩	A J z - II 中
			26	$2.89 \times 1.41 \times 0.51$	1	"	A J z - II 中
			27	全あり $2.49 \times 0.84 \times 0.40$	1	鉄石英	A J z - II 下
			28	$3.28 \times 1.02 \times 0.46$	1	流紋岩	A J z - II 下
			29	小部分? $3.01 \times 1.46 \times 0.57$	1	珪質頁岩	A J x - II

石 鋸 (三角身)	無柄	30	30	$2.81 \times 1.19 \times 0.81$	1	め の う	A J 1 - II 下
		31	31	$3.92 \times 1.18 \times 0.86$	2	珪 質 灰 岩	CA-A 1 - II 下
		32	32	$2.61 \times 0.92 \times 0.50$	1	"	A J 1 - II 中
		33	33	$2.48 \times 1.02 \times 0.52$	1	め の う	"
		34	34	$2.43 \times 1.15 \times 0.51$	1	珪 質 灰 岩	A J 2 - II 下
		35	35	$1.51 \times 0.72 \times 0.28$	1	"	"
		36	36	$1.53 \times 1.17 \times 0.35$	1	め の う	A J 2 - II 下
		37	37	$1.43 \times 1.44 \times 0.32$	1	珪 質 灰 岩	"
		38	38	$1.31 \times 1.06 \times 0.46$	1	"	CA-A 1 - II 中
		39	39	$2.22 \times 1.28 \times 0.39$	1	め の う	A J 1 - II 中
	有柄	40	40	$2.29 \times 1.05 \times 0.62$	1	珪 質 灰 岩	A J 1 - II 中
		41	41	$2.69 \times 1.62 \times 0.90$	2	"	A N 2 - II 下
		42	42	$2.40 \times 1.27 \times 0.45$	1	"	A J 1 - I 下
		43	43	$2.22 \times 1.32 \times 0.45$	1	め の う	A K 1 - II 上
		44	44	$2.01 \times 1.49 \times 0.37$	1	珪 質 灰 岩	A K 1 - II 上
		45	45	$2.39 \times 1.21 \times 0.30$	1	"	A K 1 - II 上
		46	46	$2.16 \times 1.21 \times 0.22$	1	"	A K 1 - II 中
		47	47	$3.12 \times 1.32 \times 0.65$	2	"	A J 2 - II 下
		48	48	$2.29 \times 0.90 \times 2.90$	1	"	A J 1 - II 下
		49	49	$3.91 \times 1.59 \times 0.55$	2	珪 質 灰 岩	A J 1 - II 中
二等級 (三角身)	有柄	50	50	$2.97 \times 1.30 \times 0.52$	1	"	A K 1 - II 中
		51	51	$3.52 \times 1.37 \times 0.76$	2	"	A J 1 - II 中
		52	52	Pick $3.0 \times 1.28 \times 0.56$	1	"	A J 1 - II 中
		53	53	$3.02 \times 1.25 \times 0.51$	2	"	A K 1 - II 上
		54	54	$3.34 \times 1.32 \times 0.67$	2	"	A K 2 - II 上
		55	55	$2.92 \times 1.12 \times 0.45$	1	"	A K 1 - II 中
		56	56	$1.94 \times 1.01 \times 0.43$	1	"	A J 2 - II 下
		57	57	$4.94 \times 1.27 \times 0.52$	2	"	A J 1 - II 中
		58	58	$4.52 \times 0.14 \times 0.52$	2	"	A J 2 - II 下
		59	59	$2.89 \times 1.18 \times 0.36$	1	"	A J 1 - II 中
有柄 (長身)	有柄	60	60	$3.87 \times 0.71 \times 0.43$	1	"	A K 2 - II 下
		61	61	$2.88 \times 1.02 \times 0.51$	1	"	A K 2 - II 下
	有柄	62	62	$2.21 \times 0.68 \times 0.45$	1	"	A J 2 - II 下

	有柄		63	63	$2.99 \times 1.21 \times 0.36$	1	珪質頁岩	AKz-I下
削器 Side scraper	横形 Flake	2	64	1	$3.65 \times 4.75 \times 1.10$	15	めのう	CA-A1-II
			65	2	$4.42 \times 5.18 \times 0.68$	10	珪質頁岩	AJ1-II中
			66	3	$4.04 \times 5.45 \times 0.98$	40	"	AJ1-II中
			67	4	$5.35 \times 7.62 \times 1.25$	40	"	CA-B1-II
			68	5	$5.30 \times 7.87 \times 0.98$	30	"	CA-B2-II
			69	6	$5.28 \times 5.89 \times 1.02$	28	"	AJ1-II中
			70	7	$5.86 \times 6.50 \times 1.62$	43	"	AKz-II
			71	8	$5.75 \times 3.89 \times 1.78$	20	"	AJ1-II上
			72	9	$4.35 \times 5.50 \times 0.86$	16	"	CA-A1-II中
			73	10	$5.05 \times 4.86 \times 1.16$	20	"	CA-A1-井戸内 上より
			74	11	$4.61 \times 5.55 \times 2.02$	25	"	AJ2-II下 (礫土上)
			75	12	$2.90 \times 3.17 \times 0.61$	5	"	AJ2-II下
			76	13	$2.81 \times 6.06 \times 0.82$	20	"	AJ1-II中
			77	14	$4.62 \times 5.58 \times 1.70$	40	めのう	AJ1-II中
			78	15	(未完) $4.41 \times 5.88 \times 3.3$	10	珪質頁岩	CA-A1-II
			79	16	$5.0 \times 6.87 \times 1.12$	30	"	AKz-II
	無柄 横形 有柄 (縦形)	2	80	1	$5.79 \times 2.88 \times 0.64$	10	珪質頁岩	ANz-II
			81	2	$3.65 \times 3.37 \times 1.02$	18	"	AKz-II
			82	3	$7.08 \times 3.31 \times 1.19$	30	"	CB-E1-II
			83	4	$8.91 \times 3.78 \times 1.48$	50	流紋岩	AJ1-II中
			84	5	$7.98 \times 5.31 \times 1.02$	72	珪質頁岩	AJ1-II上
			85	6	$6.78 \times 3.76 \times 1.08$	30	"	AJ2-II下
			86	7	$5.50 \times 2.46 \times 0.76$	10	"	AJ1-II上
			87	8	$3.60 \times 0.88 \times 0.66$	8	"	AJ1-II中
			88	9	^{Flake} $4.65 \times 1.85 \times 0.36$	8	めのう	AJ1-II中
			89	10	$6.15 \times 1.98 \times 0.58$	10	珪質頁岩	AJ1-II中
	Flake 不定形	3	90	11	$4.10 \times 1.98 \times 0.87$	10	"	CA-A1-II
			91	12	$5.57 \times 2.91 \times 1.08$	20	"	AEs-II
			92	13	$6.68 \times 2.41 \times 1.0$	20	"	AKz-II
			93	14	$6.65 \times 4.0 \times 1.72$	45	黒曜石	AKz-II
			94	1	$11.0 \times 6.32 \times 1.66$	122	珪質頁岩	ANz-II
			95	2	$8.61 \times 3.26 \times 1.54$	40	"	ANz-II

削器 Side scraper	(不定形) Flake	3	96	3	$1.08 \times 2.25 \times 1.02$	10	*	AK2-II
			97	4	$4.03 \times 3.06 \times 1.12$	12	*	CB-E2-II
			98	5	$6.96 \times 4.21 \times 0.94$	35	*	AJ2-II下
			99	6	$8.99 \times 4.32 \times 1.02$	40	*	AJ1-II中
			100	7	$8.35 \times 5.59 \times 1.42$	60	*	AJ1-II中
			101	8	$4.10 \times 5.38 \times 1.08$	32	*	*
			102	9	$(Chipping) 4.02 \times 6.0 \times 1.16$	40	珪質頁岩	AJ2-II下
			103	10	$(Chipping) 4.04 \times 6.28 \times 1.36$	30	*	AN2-II
			104	11	$2.42 \times 5.62 \times 0.96$	20	*	AK1-II
			105	12	$(Chipping) 5.68 \times 4.45 \times 1.86$	18	*	AJ1-II中
			106	13	$(Chipping) 4.22 \times 2.42 \times 1.11$	25	*	AJ1-II中
			107	14	$(Chipping) 4.22 \times 2.43 \times 1.30$	15	*	AJ1-II中
			108	15	$(Chipping) 2.87 \times 4.92 \times 0.52$	12	*	AK1-II
			109	16	Flake $5.74 \times 9.91 \times 2.23$	158	*	CA-A1-II上
			110	17	$5.11 \times 9.82 \times 1.69$	70	*	CA-B1-II
			111	18	$7.49 \times 4.71 \times 1.18$	40	*	AJ1-II中
搔器 Scraper	定形 Defined	4	112	1	$5.40 \times 3.22 \times 1.32$	20	珪質頁岩	表土中 CB-D1-II
			113	2	$4.92 \times 2.63 \times 1.20$	15	*	AN2-II
			114	3	$4.50 \times 1.68 \times 0.86$	10	めのう	CA-B3-II
			115	4	$2.72 \times 2.12 \times 1.18$	10	珪質頁岩	AJ1-II中
			116	5	$3.96 \times 2.20 \times 1.06$	10	*	AJ2-II中
			117	6	$3.86 \times 3.62 \times 1.12$	12	*	CB-E1-II
			118	7	$9.46 \times 4.52 \times 2.52$	10	*	CA-B1-II
			119	8	$5.08 \times 4.06 \times 1.67$	40	*	CB-F1-II中
			120	9	(典型的な形) $3.76 \times 1.82 \times 1.87$	10	*	AJ1-II中
			121	10	$3.50 \times 4.20 \times 1.36$	60	*	AK1-II
			122	11	$4.96 \times 4.11 \times 1.29$	34	めのう	AK1-II
			123	12	(楕円) $5.47 \times 4.32 \times 2.20$	70	珪質頁岩	AJ1-II下
			124	13	(楕円) (素光) $5.99 \times 4.17 \times 1.91$	40	*	CA-A1-II
			125	14	$3.22 \times 2.09 \times 1.08$	10	*	CB-B2-II
			126	15	$4.04 \times 2.07 \times 1.17$	10	*	AJ1-II中
			127	16	$3.85 \times 2.12 \times 0.92$	10	*	CA-B2-II下
			128	17	$4.37 \times 3.12 \times 1.41$	15	*	AJ1-II中

			129	18	$4.75 \times 3.27 \times 0.97$	22	珪質頁岩	CA-A ₁ -II下
			130	19	$4.55 \times 2.62 \times 0.85$	15	※	※
			131	20	$4.88 \times 2.17 \times 1.15$	20	※	※
			132	21	(幾次) $2.23 \times 1.52 \times 0.76$	8	めのう	AJ ₁ II中
			133	22	(幾次) $6.31 \times 3.06 \times 1.49$	20	珪質頁岩	AK ₂ II上
			134	23	(幾次) $3.72 \times 3.0 \times 1.12$	10	※	AJ ₂ II下
			135	24	$9.42 \times 3.55 \times 1.55$	63	※	AK ₁ - II
			136	25	$6.28 \times 2.88 \times 1.10$	20	※	CA-A ₂ -II下
石槍 (Point)		5	137	1	Flake $3.49 \times 1.44 \times 0.80$	2	※	AJ ₁ - II
			138	2	Flake $5.13 \times 2.81 \times 0.68$	10	※	AN ₂ - II
			139	3	Flake $3.82 \times 2.16 \times 0.98$	10	※	AN ₂ - II
			140	4	$4.65 \times 1.52 \times 1.24$	4	※	※※
			141	5	$5.12 \times 2.22 \times 1.11$	12	※	AJ ₁ - II中
			142	6	Flake $4.08 \times 2.32 \times 0.76$	10	※	CB-D ₂ - II
			143	7	(次細) $1.96 \times 1.95 \times 0.50$	1	※	AJ ₁ - II上
			144	8	$6.68 \times 2.31 \times 1.36$	22	※	CB-E ₁ - II
			145	9	$4.75 \times 1.42 \times 0.72$	10	※	AJ ₁ - II中
			146	10	Pitch $6.60 \times 1.08 \times 0.65$	8	※	AJ ₁ - II中
Flake		5	147	11	$5.14 \times 1.21 \times 0.72$	10	※	AJ ₁ - II中
			148	12	$4.62 \times 0.98 \times 0.65$	10	※	AJ ₁ - II中
			149	13	$4.65 \times 0.92 \times 0.66$	7	※	AK ₂ - II下
			150	14	$3.92 \times 2.0 \times 0.75$	9	※	AJ ₁ - II中
			151	15	$6.31 \times 2.96 \times 0.92$	20	※	AK ₂ - II
			152	16	$6.71 \times 4.21 \times 1.22$	30	※	CA-A ₁ -II中
			153	17	(小形未完) $3.42 \times 1.98 \times 0.76$	10	※	※
			154	18	$4.49 \times 3.88 \times 0.99$	10	※	AK ₂ - II
			155	19	$4.02 \times 2.18 \times 0.75$	4	※	AN ₂ - II
			156	20	$3.84 \times 1.74 \times 0.96$	5	※	AK ₁ - I
石錐 (Drill)		5	157	1	$3.42 \times 1.27 \times 0.85$	3	※	AJ ₁ - II中
			158	2	$5.08 \times 1.92 \times 1.02$	10	※	AE ₅ - II
			159	3	$7.92 \times 3.52 \times 1.27$	30	※	CA-B ₁ -II下
石斧		5	160	1	(複合) $8.85 \times 4.16 \times 1.16$	68	ホルンフェルス	AK ₂ - II
			161	2	(-) $7.65 \times 4.43 \times 2.18$	111	※	CA-A ₁ - II下

石斧	(磨製)	5	162	3	(一) 5.96×4.02×2.98	103	ひん岩	AK ₁ -II
			163	4	6.94×5.10×2.01 (大形)	130	ホルンフェルス	CB-E ₂ -II
			164	5	4.35×4.96×1.90 (中形)	40	"	CA-A ₁ -II
			165	6	3.98×3.22×2.57 (小形)	50	"	CB-E ₁ -II
			166	7	10.02×4.67×2.27 (再生)	195	ひん岩	AJ ₁ -II上
			167	8	7.11×4.05×2.49 (復原)	65	"	CA-A ₁ -II上
		6	168	9	7.91×4.60×2.78 (復原)	160	"	AK ₁ -II上
			169	10	13.65×4.12×2.42 (複原)	280	ホルンフェルス	AK ₁ -II上
			170	11	4.86×3.01×2.36 (残欠)	50	"	AJ ₁ -II下
			171	12	5.55×3.71×1.72 (残欠)	80	"	AK ₁ -II下
			172	13	6.56×3.34×2.67 (残欠)	90	"	AK ₁ -II下
			173	14	4.36×1.48×0.48 (再生?)	10	千枚岩	AJ ₁ -II中
			174	15	6.65×2.91×1.10 (残欠)	38	ひん岩	AJ ₁ -II上
石棒	(磨製)	6	175	16	4.02×1.67×0.55 (残欠)	10	千枚岩	AK ₁ -II中
			176	17	2.45×3.52×1.62 (残欠)	22	ホルンフェルス	CB-E ₁ -II
			177	1	(複原) 21.90×2.66×2.17 (複原)	200	珪化木	AJ ₁ -II
			178	2	8.78×2.41×1.08 (石棒断面)	40	"	CA-A ₁ -II
		7	179	3	7.55×3.32×0.97 (石棒断面)	40	"	AK ₂ -II
			180	4	16.7×2.92×1.28 (内核部)	140	千枚岩	AJ ₁ -II上
			181	5	35.0×3.20×2.81 ☆182	480	珪化木	AJ ₂ -II下
石刃 (内反)	(内反)	7	182	6	11.48×5.0×5.2 (残欠)	300	泥岩	AN ₃ -II
			183	1	17.5×3.64×1.52 (残欠)	138	珪化木	AJ ₂ -II下
			184	2	8.87×3.64×0.86 (内反)	47	"	AK ₂ -II
石冠	(梯形) (方形)	8	185	3	6.60×2.40×1.42 (石面上に沿用?)	46	千枚岩	AK ₂ -II
			186	1	7.34×10.15×5.24 (未完)	590	ひん岩	CB-D ₂ -II
			187	2	6.54×12.32×4.26 (未完)	360	安山岩	AN ₂ -II
		8	188	3	7.98×14.3×3.78 (未完)	480	"	AK ₂ -II
打欠き のある 扁平石器	(梯形) (方形)	8	189	1	6.11×6.14×1.16 (大形)	100	流紋岩	CB-D ₁ -II
			190	2	6.25×4.92×2.31 (大形)	90	"	CA-A ₁ -II上
			191	3	9.68×10.3×4.39 (大形)	562	"	AJ ₁ -II下
			192	4	4.6×5.61×2.15 (大形)	70	珪質頁岩	AJ ₁ -II中
			193	5	6.41×7.25×2.72 (大形)	110	流紋岩	AN ₂ -II下
			194	6	6.48×7.31×3.12 (大形)	200	"	CB-E ₁ -II下

打欠き のある 扁平石器	(梯形) & (方形)	8	195	7	$5.86 \times 6.35 \times 1.0$	55	*	CB-E ₂ -II
			196	8	$5.98 \times 4.75 \times 1.25$	50	*	CB-D ₁ -II
			197	9	$5.68 \times 5.58 \times 1.36$	60	*	CB-D ₂ -II
			198	10	$4.69 \times 3.51 \times 1.0$	30	*	CB-E ₁ -II
	梯円形	9	199	1	$6.98 \times 6.12 \times 1.12$	130	流紋岩	AJ ₂ -II下
			200	2	(小形) $3.98 \times 5.29 \times 0.71$	20	*	AJ ₁ -II中
			201	3	$5.19 \times 6.12 \times 1.83$	70	*	CA-A ₁ -II上
			202	4	$6.11 \times 6.81 \times 2.10$	92	*	AJ ₁ -II下
			203	5	$5.51 \times 4.55 \times 1.22$	60	花崗閃綠石	CA-B ₁ -II
			204	6	$8.5 \times 4.76 \times 1.11$	70	*	CA-A ₁ -II中
			205	7	$5.05 \times 3.98 \times 1.42$	50	流紋岩	CB-E ₂ -II
	(円形)	9	206	1	$9.15 \times 9.08 \times 3.39$	332	安山岩	AJ ₁ -II中
			207	2	$5.68 \times 5.78 \times 3.28$	58	*	AN ₂ -II
			208	3	$6.29 \times 6.90 \times 2.22$	132	*	AN ₂ -II
			209	4	(小形) $4.48 \times 4.53 \times 1.02$	30	*	AK ₂ -II
			210	5	$5.62 \times 5.35 \times 2.16$	100	花崗閃綠岩	CA-A ₁ -II
			211	6	$3.91 \times 4.32 \times 1.41$	38	*	CA-A ₁ -II上
			212	7	$5.92 \times 6.66 \times 1.64$	102	頁岩	AJ ₁ -II中
			213	8	$6.78 \times 6.49 \times 2.84$	90	凝灰岩	CA-A ₁ -II
			214	9	$7.10 \times 6.48 \times 1.42$	92	流紋岩	CB-E ₁ -II
			215	10	$3.68 \times 4.0 \times 1.98$	40	*	CB-D ₂ -II
			216	11	$6.31 \times 5.87 \times 2.48$	140	*	AK ₁ -II
唐衣のある 扁平石器	10	10	217	1	$6.50 \times 4.68 \times 1.54$	72	ひん岩	CB-C ₃ -II
			218	2	$9.68 \times 6.84 \times 1.91$	205	*	CA-B ₁ -II中
			219	3	(赤面あり) $9.37 \times 3.92 \times 1.76$	105	流紋岩	CA-A ₁ -II上
			220	4	$12.4 \times 4.49 \times 1.69$	120	ひん岩	AJ ₁ -II下
			221	5	(残欠) 朱斑点あり $7.85 \times 4.70 \times 1.96$	120	ホルンフェルス	*
			222	6	(打欠き2ヶ所) $9.36 \times 5.04 \times 1.39$	112	流紋岩	AJ ₁ -II中
			223	7	朱斑点あり $10.29 \times 4.28 \times 1.30$	100	*	*
			224	8	$9.74 \times 6.87 \times 2.69$	300	ひん岩	CA-A ₁ -II上
			225	9	$11.03 \times 5.36 \times 1.87$	290	ホルンフェルス	AN ₃ -II
			226	10	朱斑点あり $10.08 \times 6.19 \times 1.99$	290	ひん岩	AK ₂ -II
			227	10	(残欠) $3.48 \times 7.59 \times 1.05$	35	"	CA-B ₁ -II

		☆	228	12	(横大) 5.28×7.78×2.10	110	凝灰質砂岩	CB-D ₁ -II
タキ石	10	229	1	7.58×6.10×3.35	240	花崗閃綠岩	CB-E ₁ -II	
		230	2	9.30×5.96×3.0	260	*	*	
		231	3	11.40×5.80×4.78	400	*	*	
		232	4	15.02×6.65×3.32	540	ひん岩	CA-A ₁ -III上	
		233	5	12.34×5.61×2.57	292	花崗閃綠岩	*	
		234	6	7.32×9.63×4.31	450	*	*	
		235	7	10.85×5.54×2.73	270	*	CB-E ₁ -II	
		236	8	11.02×8.46×6.32 (石縫とも見られる)	930	*	CB-D ₁ -II	
		237	9	11.78×7.94×5.46 木の突きあり	11.6	*	A J ₂ -II中	
		238	10	7.78×5.83×4.71 木の突きあり	308	ひん岩	CA-A ₂ -III中	
	11	239	11	7.60×6.27×5.35 裏面に擦痕あり	370	花崗閃綠岩	CA-A ₁ -II	
		240	12	7.48×5.08×3.68 (表面研磨)	195	ひん岩	A N ₂ -II下	
		241	13	9.89×7.88×6.22 (横大)	720	花崗閃綠岩	A K ₁ -II上	
		242	14	4.86×4.76×4.70	138	*	A N ₂ -II	
		243	1	加工痕無し	135	浮石	A J ₁ -II中	
		244	2	底面に若干の加工あり	50	*	A K ₂ -II	
		245	3	底面を平滑に加工	20	*	CB-E ₂ -II	
軽石	11	246	4	全面平滑整形	20	*	A K ₁ -II	
		247	5	三面に整形痕あり	65	*	A K ₂ -II	
		248	6	全面に整形痕あり	12	*	A K ₁ -II中	
		249	7	*	68	*	CA-A ₁ -II中	
		250	1	12.3×7.82×5.17	510	安山岩	C X ₁ -II	
		251	2	12.16×8.03×3.66	330	頁岩	CA-A ₁ -II上	
		252	3	9.82×4.02×2.81	120	安山岩	*	
タボミ石	12	253	4	12.15×7.93×3.62	500	流紋岩	A K ₁ -II中	
		254	5	9.92×6.91×3.36 石縫の可能性あり	332	安山岩	A J ₁ -II下	
		255	6	12.78×7.43×4.34	440	流紋岩	A K ₂ -II	
		256	7	13.82×6.04×5.09	428	安山岩	A K ₁ -II中	
		257	8	15.24×5.72×3.58	350	*	A J ₁ -II中	
		258	9	10.96×7.97×4.67	270	*	A K ₁ -II中	
		259	10	7.90×6.02×5.55	210	*	A J ₁ -II下	
		260	11	8.53×11.84×4.27	223	頁岩	CA-A ₁ -II下	

石 弾		13	261	1	$4.48 \times 4.87 \times 4.38$	60	花 岌 閃 緑 岩	CX ₁ - II
			262	2	$4.76 \times 5.18 \times 4.67$	92	凝 灰 岩	CA-A ₁ - II F
抉入石器		13	263	1	$5.06 \times 6.22 \times 2.05$	40	珪 賢 黃 岩	CX ₁ - II
橢円形 扁平石器 (鉈状石器 を含む)		13	264	1	$7.43 \times 5.0 \times 1.44$	72	(縦面岩) 流 紋 岩	CB-D ₁ - II
			265	2	$9.16 \times 9.11 \times 1.80$	43	*	CB-F ₁ - II
			266	3	$11.48 \times 15.24 \times 5.84$	424	*	CB-F ₁ - II
			267	4	$8.84 \times 11.94 \times 2.53$	1.12	*	A E s - II 上
			268	5	$6.42 \times 9.12 \times 2.01$	180	*	CA-A ₁ - II 中
穿穴石		13	269	1	$6.66 \times 6.27 \times 3.40$	47	流 紋 岩	A J ₁ - II 中
			270	2	(自然石) $6.31 \times 4.65 \times 2.21$	50	頁 岩	A K ₁ - II 中
			271	3	(自然石)(未穿穴) $12.46 \times 8.98 \times 5.26$	490	安 山 岩	CA-B ₁ - II 中
溝状痕痕 のある石器		13	272	1	(骨) $18.5 \times 11.37 \times 11.28$	2.18	石 灰 岩	A J ₁ - II 中
		14	273	1	(足高を含む) $36.5 \times 27.2 \times 9.7$	10.9	石 英 安 山 岩	CB-E ₂ - II F
			274	2	(底面に溝2本あり(横幅)(奥行) $8.80 \times 8.39 \times 2.21$	150	細 粒 砂 岩	CB-E ₂ - II F
石 盤		15	275	3	(横欠) $13.10 \times 12.31 \times 6.59$	1.85	石 英 安 山 岩	A J ₁ - II 中
			276	4	(横欠) $8.85 \times 11.27 \times 6.04$	740	安 山 岩	A J ₁ - II 中
			277	5	(横欠) $16.2 \times 9.46 \times 3.81$	550	凝 灰 岩	A J ₁ - II 中
			278	6	(横欠) $15.5 \times 10.50 \times 3.86$	837	安 山 岩	A K ₁ - II 上
石 锤		15	279	1	$6.35 \times 5.52 \times 1.38$	50	流 紋 岩	CA-B ₁ - I
			280	1	$9.37 \times 6.0 \times 1.0$	85	流 紺 岩	CA z - II F
	大形 円盤状		281	2	(横欠) $4.21 \times 3.29 \times 0.69$	10	泥 岩	A J ₂ - II 上
			282	3	$0.74 \times 0.75 \times 0.40$	1	め の う	A K ₂ - II 下
垂飾品	小玉	16	283	4	$0.95 \times 0.75 \times 0.44$	1	綠 色 凝 灰 岩	A J ₁ - II 中
			284	5	$0.41 \times 0.61 \times 0.36$	1	*	(口 - Z 内) A J ₂ - II D
			285	6	$0.67 \times 0.63 \times 0.42$	1	*	A J ₂ - II 中
			286	7	(未穿孔) 欠 $1.05 \times 0.82 \times 0.79$	1	*	A J ₁ - II 中
			287	8	$1.58 \times 0.71 \times 0.30$	1	*	(口 - Z 内) A K ₂ - II 下
	自然石		288	9	穿孔あり $0.55 \times 0.43 \times 0.42$	8	*	A J ₁ - II 中
			289	10	$0.55 \times 0.43 \times 0.42$	1	蛋白石	A J ₂ - II D
線刻石		17	290	1	(下半空) $13.08 \times 8.36 \times 4.15$	410	泥 岩	A K ₁ - II 中
			291	2	上半空		*	A K ₁ - II 中
			292	3	$5.50 \times 3.62 \times 1.75$	30	*	A K ₂ - II 中
鐵製品		17	293	1	$3.90 \times 1.67 \times 1.02$	5		CA-A ₂ - II

柱状石		18	294	1	(横存) 9.22×3.15×2.42	120	流 紋 岩	A J 1 - II 中	
			295	2	27.4×3.60×3.13 (横矢)	600	流 紺 岩	A N 2 - II	
			296	3	7.32×3.31×1.85	62	タ	A J 2 - II 下	
方形石 製品			297	4	7.76×7.96×2.66	270	安 山 岩	A K 1 - II 上	
			298	5	5-0036 (角3ヶ) 2.71×2.62×1.57	15	碧 玉	A J 1 - II 中 A K 1 - II 上	
			299	6	5-0036 (角3ヶ) 2.42×1.94×1.14	10	タ	A J 1 - II 中 A K 1 - II 上	
緑色原石			300	7	7.1×6.56×2.81	112	方 解 石	A J 1 - II 中	
			301	8	7.71×5.91×4.41	58	安 山 岩 溶 岩	A J 1 - II 下	
			302	9	3.80×3.18×2.78	33	鐵 石 英	C A - A 1 - II 上	
赤色 原石			303	10	3.48×2.59×1.92	25	タ	A J 1 - II 下	
			304	11	3.98×3.18×2.48	40	タ	A K 2 - II 上	
			305	12	2.98×2.20×1.72	15	タ	A J 2 - II 下	
緑色 原石 ・ 自然石 等			306	13	1.67×1.32×1.10	5	凝灰質変朽安山岩	A J 1 - II 中	
			307	14	0.98×1.14×1.10	5	タ	A J 2 - II 下	
			308	15	1.90×0.93×0.75	7	碧 玉	タ	
自然石 球形			309	16	菱形縦面あり 1.43×1.54×1.02	8	凝灰質変朽安山岩	A J 2 - II 下	
			310	17	痕痕あり 1.70×1.62×1.18	8	碧 玉	タ	
			311	18	1.52×1.45×1.20	9	タ	タ	
			312	19	1.15×1.30×0.90	6	タ	タ	
			313	20	1.18×1.03×0.76	1	凝灰質変朽安山岩	タ	
			314	21	1.0×0.86×0.55	1	碧 玉	タ	
			315	22	1.15×0.75×0.65	1	タ	タ	
			316	23	1.29×1.08×0.86	2	タ	A N 2 - II	
			317	24	24-026 (角1ヶ) 1.15×0.93×0.52	1	タ	A J 2 - II 中 A N 2 - II	
			318	25	0.90×0.81×0.69	1	玉 す い	A J 1 - II 中	
			319	26		98	め の う	A K 1 - II 中	
			320	27		110	タ	A K 2 - II 中	
			321	28	(Chipping) 細部加工痕あり	30	玉 す い	A J 1 - II 下	
			322	29	Chipping痕あり	35	め の う	A J 2 - II 下	
			323	30		20	蛋 白 石	A J 2 - II 下	
鉱 石			324	31		10	タ	A J 1 - II 中	
			325	32	7.0×3.91×2.28	130	方 鉛 鉱	A J 2 - II 下	
植物		19	326	33	炭化材 9 こ			C A - B 1 - II	

植物 (炭化)	核果 表皮	19	327	34				
			328	1				A J ₂ - II F
黑曜石		20	329	1		18	黑 耀 石	A J ₂ - II 中
			330	2		10	*	A K ₂ - II
			331	3		22	*	A K ₁ - II 中
			332	4		11	*	*
			333	5		10	*	A J ₁ III 中
			334	6		8	*	A K ₁ - II L
			335	7		6	*	A K ₁ - II L
			336	8		45	*	C B - D ₁ - II
			337	9		10	*	A J ₁ - II 中
			338	10		10	*	C B - D ₂ - II
			339	11		20	*	A J ₂ - II F
木炭		20	340	9 — —			木炭	A J ₁ - J ₂ III F

(2) 石器・石製品 (S・P・L 1~20→自然石、鉱石、木炭等を含む、表3)

出土した石器・石製品は、つぎのとおりである。

☆石 器

①石鎌	63	23 %	⑪磨痕のある 扁平石器	12	4 %
②削器	48	17 %	⑫タタキ石	14	5 %
③搔器	25	9 %	⑬軽石製品	7	3 %
④石槍	20	7 %	⑭クボミ石	11	4 %
⑤石錐	3	1 %	⑮石弾	2	1 %
⑥石斧	17	6 %	⑯抉入石器	1	0 %
⑦石棒	6	2 %	⑰楕円形 扁平石器	5	2 %
⑧石刀	3	1 %	⑲溝状擦痕 のある石器	1	0 %
⑩石冠	3	1 %	⑳石皿	6	2 %
⑩打欠きのある 扁平石器	28	1 %	㉑石錘	1	0 %

計276。すなわち総数276ことなる。

この石器総数276に対する器種別石器の比率を求めるときとおりである。

このうち、①石鎌・②削器・③搔器・④石槍を合計すると、156ことなり石器総数に対する比率は、57%となって狩猟中心の石器組成であることが理解される。

つぎに石製品について述べる。

☆石製品

出土した石製品は、垂飾品10、線刻石2、および穿孔石3で、その出土数から見ても、ごく限られたものであることが理解できるところである。

すなわち、石製品を含めた総数276+15=292に対する比率は、5%程度のものである。

これらの石器・石製品、その他については、考察の項で再度述べることにしたい。

☆石器・石製品の岩質について（表3）

つぎに、これらの石器・石製品に用いられた岩質について述べる。

第1～第4次発掘調査で出土した石器・石製品の岩質については、それぞれの報告書で述べてあるので、ここでは、第5次発掘調査で出土したものに限定して述べる。

個々の石器等の岩質については、(表3)に述べてあるので省略する。

①珪質頁岩	144	49%	⑫花崗閃綠岩	16	5%
②めのう	15	5%	⑬頁岩	4	1%
③鉄石英	1	0	⑭凝灰岩	3	1%
④流紋岩	32(5)	4%	⑮凝灰質砂岩	1	0
⑤黒曜石	1	0	⑯浮石	7	2%
⑥ホルンフェルス	12	4%	⑰石灰岩	1	0
⑦玢岩	15	5%	⑱石英安山岩	2	1%
⑧千枚岩	4	1%	⑲細粒砂岩	1	0
⑨泥岩	4	1%	⑳緑色凝灰岩	6	2%
㉑珪化木	6	2%	㉒蛋白石	1	0
㉓安山岩	16	5%	計	292	

上に示したとおり、石器・石製品総数292に対する石器等の岩質別比率を求めるとき、珪質頁岩が49%と極端に多いことが理解される。

また、次に多いのが、安山岩・花崗閃綠岩・玢岩・めのう等の5%である。また、流紋岩・ホルンフェルスが4%である。

このことから、縄文人は、岩質の特徴を生かした選定を永年経験から知っていたのであろう。また、いわゆる刃器等の狩猟用に用いられるものは、珪質頁岩が多く利用されているようであり、食料の生産・調理が石器の岩質からも理解されるところである。

なお、当遺跡は、土師器・須恵器等の出土もあり、歴史時代の石器も若干含まれている。それらについては、S・P・L1～20において註記しておいた。また、これらの石器・石製品の出土区、層位については、表3に示してあるので省略する。

(3) 銀音林遺跡出土、鉄製品について、(銀音林遺跡(第四次)報告書参照)

昭和60年度の第四次発掘調査において、C地区X1グリットⅡ層下出土の刀子状鉄製品に

について、岩手県立博物館の御好意により、金属学的解析結果をいただいた。以下そのことについて述べることにする。

観音林遺跡出土鉄器の金属学的 解析結果について

岩手県立博物館 赤沼英男

平安時代中期には、東北地方北部のかなり広い範囲で磁鐵鉱を原料とする鉄器が使用されていた可能性が高い。¹⁾ 本遺跡から出土した鉄器は発掘報告書によれば、平安時代後期の住居跡からのものと推定されており、上記の関連を踏まえれば同資料の金属学的解析は平安期における鉄文化を探るうえで、興味のもたれるところである。錆化資料のため調査に制約を伴い十分な成果を得ることができなかったが、以下にその結果を報告する。

1. 調査資料および方法

試料鉄器は図1に示すとおりである。いくつかの小片に切断されており、製作時の形態を推定することはきわめて難しい。ここではその形状等を勘案し、発掘報告書同様刀子状鉄器と記述することにとどめておく。(図1は掲示せず)

自然科学的調査は1a(0.6g)の小片から採取した2つの錆片合計0.8gを用いて行った。大きな錆片は樹脂に埋め込み十分研磨した後、組織観察用資料とした。一方微小小片については赤錆部分を取り除き、ほとんど黒錆層とした後、王水に溶解させ化学成分分析に供した。なお化学成分分析は誘導結合プラズマ(I C P)法により行った。

2. 分析結果ならびに考察(図1、図2-a・bは掲示せず)

図1に刀身断面のマクロ組織を示す。灰色部は黒錆層(Fe_3O_4)、暗灰色部は赤錆層($FeO \cdot OH$)である。刀身断面中央部は鉄分の溶出によりそのほとんどが失われている。錆化の進行の著しさをうかがうことができる。図2-a及びbは刀身断面中央部A並びにB(いずれもマクロ組織中に指示)のミクロ組織である。内部に網目状をした黒色の組織を観察することができるが、これは健全な鋼のパーライト相のうちのセメントタイトが欠落して生じた組織である。また網目状組織によって囲まれる黒錆の小領域はもと

の鋼のフェライト相に対応する。鉄化による結晶の膨張を無視すれば、網目状組織（もとの鋼のパーライト相）が占める面積割合から推定される炭素含有量は0.1%弱と評価される。またもとの鋼のフェライト相の大きさは20~30μとなり、従って刀身断面中央、及び棟部は800°C付近の高温領域からゆるやかに冷却された軟鋼によって構成されていたものと考えられる。刃部については鉄化が著しくそのミクロ組織を読み取ることができない。刃金鋼が用いられたかどうかは不明である。

鋼中には介在物がほとんど認められず、清純な鋼の使用を暗示させる。表1は黒鉛屑の化学成分分析値であるが、Si/T·Feは0.047%と低くこの値から

表1 試料鉄器の化学組成

鉄質	T·Fe	Cu	Mn	P	Ti	Si	Ca	Mg	Al
鉄化	---	—	—	—	—	—	—	—	—

予想される珪酸塩質介在物量は0.1~0.2%にすぎない。不純物の少ない鋼であり、先の組織観察の結果と一致する。Ca, Al, 及びMgも低レベルにある。

次に使用原料について検討する。砂鉄の指標元素であるTi/T·Feは0.02%と低い。一方、鉱石指標となるCu/T·Fe, 及びMn/T·Feについては0.01%以下であるがP/T·Feは0.09%とかなり高い値を示す。鋼中に残存するわずかな介在物もウスタイト主体のものであり、チタン鉱物が全く観察されないこと等を考え合わせれば使用原料は磁鐵鉱であると判断される。

磁鐵鉱を原料とする清純な地金が平安後期に津軽の鉄器にも使用されていることが明らかとなった。同様の結果は岩手県淨法寺町に位置するアスカ遺跡出土鉄器においても確認されている。²⁾ 平安時代中期、東北地方北部に新たに高度な鉄器生産技術がもたらされた可能性が高いことを指摘できる。

註 1) 三浦謙一「飛鳥大地」遺跡発掘調査報告書 岩手県教育委員会 1987

2) 1) に同じ

以上のような解析結果をいただいた。なお出土状況等については、「観音林遺跡」→第四次発掘調査報告書に述べてある。なおさらに詳しい分析結果については後日にゆることにする。

既述のものは一応中間的報告としていただいたものである。

(4) 骨類（昆虫を含む）→(B・P・L1~5, 表2)

当観音林遺跡の第五次発掘調査において、A地区J1・J2・K1・K2グリット、およびF5グリット、さらにC地区A・Bグリットよりシャレーにて15c程の微小骨片類を検出した。これらの骨類について、早稲田大学金子浩昌氏に鑑定を依頼し御回答をいただいた。その鑑定結果については、P38に示す表2のとおりである。

表2に示すとおり、第五次発掘調査においては、A地区→E5 F5 グリット、J1・J2・K1・K2グリット、C地区→A・BグリットおよびAN2グリット・AN3トレーナーを発掘区としたが、このうち中央区のAN2・AN3を除く、A地区、C地区的各区より出土した。

(第2・3図参照)

微小骨類は、第二次・第三次・第四次発掘調査においても出土したが大部分が焼骨片であった。（観音林遺跡→1983・1984・1985、五所川原市教育委員会）

表2にみるとおり、第五次発掘調査においても焼骨が目立っている。

大別すると、①獸骨・②鳥骨に分けられるが、前者はシカ、ノウサギ、イノシシ等、後者はカモ等がある。

第二～四次発掘調査においてもシカ・イノシシ、イヌ・タヌキ、キツネ、イルカ、アシカ等と思われる獸骨の出土があり、今回は、ノウサギが加わっている。

また、新しい知見として、昆虫羽等も出土しており、縄文時代晚期（大洞B・C～A式期）における動物相が少しずつ明らかになりつつあることは喜ばしいことである。わたしたちは少しずつでも縄文時代晚期における動物相を明らかにしていきたいと思う。

出土骨類については、考察の項で再び述べることにしたい。

(5) 植物遺物 (S・P・L19-328)

・今回の第五次発掘調査において、A地区J2グリットⅡ層下より植物の炭化遺物が2点出土した。このⅡ層は、「基本層序図—第4図」に示すとおり黒土層である。

このⅡ層においては、主として縄文時代晚期大洞A式土器が多く出土した層である。

以下に述べる「植物遺物」は、これらの大洞A式土器に伴って出土した。

・出土した資料は2点であるが、一つは一箇体、いま一つは数個の細片となって検出された。

この2点の資料について、日本植物学会々員 木村 啓氏に同定を依頼した。その結果について以下に述べる。

〔資料No.1〕

☆植物名→*Juglans Mandshurica Maxim. Var. Sieboldiana Kitamura.*

和名 オニグルミ（クルミ科）

☆同定部→核果の一部分

☆同定の根拠→オニグルミの核果の特徴である核の表面の深いシワが明瞭である。また、核の内面の種子室が明らかに認められる。

同定者 日本植物学会々員

木村 啓

同定年月日 1987年2月15日

〔資料No.2〕

☆植物名→*Aesculus turbinata Blume*

和名 トチノキ（トチノキ科）

☆同定部→種子表皮の一部

☆同定の根拠→種子の表皮が1mm弱と薄く、しかも曲っている。むかれた種子皮のように思われる。

同定者 日本植物学会々員

木村 啓

同定年月日 1987年2月15日

以上のような同定結果をいただいた。すなわち、オニグルミ・トチノキの核果・種子の表皮の一部である。

しかも、トチノキの表皮は、むかれたものようである。このことに注目しておきたいと思うところである。

〔V〕 考 察

(1) 層序について (第4~10図)

- この項では、観音林遺跡の層序について最初に考えてみることにする。
- ・本遺跡の基本層序は、第4図に示すとおりであるが、A地区のJ1グリット北壁セクションおよびA地区のJ1・J2東壁セクション(第5・6図)を観察すると理解されるとおり、北壁セクションでは、I・II層と東から西へ傾斜をもちらながら正常堆積の状況をみせている。しかし、このII層としたものは、二次堆積の黒土層である。
 - ・また、第6図に示すとおり、北から南へ傾斜する地形に、I層(表土)、II層(黒色土)とセクションの状態を観察すれば、明らかに二次堆積であることが理解される。特にこの層序の中には☆印を付した第4図③に示す、IV層が流入する状態である。
 - ・つぎに、A地区E5F5グリットの平面図(第7図)を見ると、IV・III・II層と北より南へ傾斜する地形に層序の露出は逆順の様相を見せている。
 - ・同じく、E5F5グリットの西壁セクションを観察すると、北より南に傾斜をもちらがら、北より約2.6m程の地点より急角度で斜面となっており、III層ではなくII層は混合層を形成する状況であった。以上がA地区の層序の現状である。
 - ・つぎにC地区の層序を観察すると、つぎの事項が観察される。
 - ・C地区Bグリットでは、東壁・南壁・北壁において(第9図)、D1区①ではII層が欠けており、②③④ではII層とした原黒色土は、きわめてうすい状態で残存している。
 - ・また、第10図に示すC地区X1グリットでは、I・II層が厚くII層としたものは盛土(V層)を混入したもので基本的にはII層である。

以上のように、A地区、C地区における地層を観察した結果、この遺跡の所在する台地は、歴史時代において、中央部を削平し、II層とした原黒色土は、北側・南側に移動堆積したものと考えることが妥当であろう。

特にA地区では、急斜面に削平された黒土が堆積したものと考えられる。

また、C地区では、台地中央部で削平された黒土が、北側の低地に移動させられ、その上に堀の上げ土が積み上げられたものと考えられるところである。

(2) 遺構について (第11・12図、13・7図)

検出した遺構は既述したとおりであるが、この項では、第五次発掘調査で発掘したもの、

および、AN2グリット検出の未完掘の遺構について述べることにする。

C地区AグリットにおいてⅤ層を掘り込んだ1号住居址、およびC地区Bグリットにおいて、2号住居址を検出したことは既に述べたが、1・2号住居址とも床の貼り付け粘土は2枚であり、柱穴の配置を検討しても、二回にわたって建て替えられた可能性が認められる。

この1・2号住居址について、その年代をどのように捉えるかは、かなり興味ある問題を含んでいる。

この問題について若干考えてみることにしたい。

●1号住居址のカマド右袖に土師器壺形土器が完形品で出土した。このものは、桜井第二型式の新しいものである。（第四次出土）

●2号住居址の床面に一部密着して、須恵器の大形の壺形土器が出土した。→P・L 45—(270)

また、2号住居址の地床炉内より（P・L 42—528～535）の土師器片が出土した。

これらの土師器、須恵器はある程度1・2号住居址の年代を知る手がかりを与えてくれるものと考えられる。

1号住居址出土の土師器と2号住居址地床炉出土の土師器は、その手法、形態等から見て同時期と考えられるものである。

また、2号住居址床面出土の須恵器も同年代と考えてよいものである。

当市内には、前田野目登り窯址があり、その窯址出土の須恵器は、鎌倉時代初頭と考えられているが、今回出土の土師器から考えれば須恵器を含めて、10世紀後半より11世紀と考えた方が妥当と思われ、時代では平安中期以降～平安末の幅で捉えたいと考えているが如何であろうか。

●つぎにA地区E5 F5グリットにおいて、柱穴を検出したが、このグリットの地層を観察する限り、Ⅴ層に柱穴が存在することから未だ遺構がどのようなものか不明である。次年度に期待したい。（第7図）

●つぎにAN2グリットにおいて、Ⅴ層上面で土塙群を検出したが、次年度に期待して埋めもどした。土塙群は、その性格等は不明であるが小土抜が10m×10mの範囲に5基程確認されたが、次年度再度調査したいと考える。

(3) 出土遺物について (A・P・L1～65, P・L1～46, S・P・L1～20, B・P・L1～5, S・P・L19, 表I・II・III)

この項では出土した遺物について簡単に述べてみる。

出土した遺物は、①土器・土製品、②石器・石製品、③骨類、④植物炭化物に分けられる。以下順に考察を加えてみたい。

①土器・土製品

土器・土製品について、そのすべてについて述べることは不可能なので要點と思われる事項について述べることにする。

・出土した土製品のうち、注目すべきは、A・P・L4—⑩に示した大洞A式土器に伴う土偶頭部、およびA・P・L3—⑨に示したもの、およびA・P・L1—①に示した人面付把手、同じくA・P・L1—⑧に示した香炉形土製品、A・P・L3—⑦に示した人面付き舟形土製品等、出土例の少ないものと考えられるものである。

●出土した土器は、既述したとおり前・中期、後期、晚期の土器群、および土師器、須恵器等であるが、前期・中期の土器群は別にして、後期の土器群は、既述のように、第3群・第4群土器として分類した。

このうち、第3群とした土器群は少數のサンプルしか掲示しなかったが、総出土量の約40%を占めるものである。この第3群土器は十腰内Ⅰ式土器のノーマルなものである。

・第4群土器としたP・L2—16・17, P・L3—22～25に掲示したものは、十腰内Ⅰ式と同Ⅱ式の間を埋める土器として今後の研究に期待しながら、特に群別に分けて掲示したものである。

・第5群土器とした十腰内Ⅱ式土器としたものは、まとまった出土例はなく、未だ詳細は不明な土器群である。今回の出土が、ある程度まとまった出土数であり、器形は2類に分類できるものであり、今後の研究に待つ土器群と考えられる。

・第6群～第9群土器は、縄文時代晚期の土器群である。

これらの、大洞B・C～大洞A式土器群のうち、大洞B・C式土器は1箇体のみで他に出土はない。すなわち、第一～五次発掘をとおして大洞B・B・C式土器の出土は観音林遺跡では出土ではなく、大洞C1～A式土器、特に大洞C2・A式土器が中心となる遺跡と考えられるところである。

・第7群土器とした大洞C1式土器群は、前型式の大洞B・C式の名残りを止めるものが

多く見られ、土器組成において、欠落する器形もあり、その意味で大洞C2・A式土器が主体の遺跡と考えられるところである。

・第8群・第9群土器とした大洞C2・A式土器は、精製・粗製を含めて土器組成は、ほぼ完全である。

このうち、大洞C2式として分類したものには、その前葉のもの、後葉のもの等の変化が認められ、また、第9群とした大洞A式土器群では、「入り組み工字文」の変形のもの、完成されたもの等の変化を認めることも可能である。

また、第8群土器a類～c類とした粗製土器は、第9群とした大洞A式期にも活用された土器群と考えて分類したものであるが、層序が二次堆積であるため仮説の域を出ないものである。

⑥石器・石製品 (S・P・L3～20, 表3)

石器・石製品は、総計276点の出土であるが、石器を器種別に分類すると、20器種に分類することが可能であった。(2)→石器・石製品の項参照。

・このうち、出土数の最も多いものは、石鎌で、そのつぎに多い順に記述すると、削器、搔器、石槍の順となる。この石鎌・削器・搔器・石槍を合計すると156点となり、総出土数276点に対する割合は、57%となって、狩猟用具の石器に占める割合が高いことが理解される。

・また、これらの石器、石製品に使用された岩質についてみると、珪質頁岩が49%を占めており、他の岩質は5%～4%程度である。

5%～4%を占める岩質は、流紋岩4%、ホルンフェルス4%、玢岩5%、安山岩、花崗閃綠岩5%となっている。

すなわち、縄文人は、自分が住む土地で、手に入れやすい岩質の特性を理解して石器に活用する知識を生活経験から知っていたものようである。

・出土した石器のうち、特に当遺跡で注意したいのは、既述の⑩打欠きのある扁平石器、⑪磨痕のある扁平石器(10%・4%)である。(S・P・L8—189～198、S・P・L9—199～216、S・P・L10—217～227)。前者は側刃に敲打による打欠きを持つものであり、後者は、側刃が擦られた痕跡をもつものである。その用途・機能等は不明であるが、後期・晩期ともに出土する石器であるが、特に当遺跡では前者の出土数が多いように思うところである。

・つぎに今回の発掘で注意したいのは、削器 (side・scraper) である。横形のもの (S・P・L2—64~79) は、典型的なものが多いのに反して、縦形のもの (S・P・L2—80~93) がフレークを活用したものが粗末である。

また搔器、石槍等においてもフレークを活用した粗末なものが多いように考えられるところである。

さらに今回の発掘で出土した輕石製品 (S・P・L11—243~249) に注目したいと考える。

出土したこれらのものは、すべて平滑に擦られているもので、なんらかの用途に供されたものと考えることが可能であった。

その他、S・P・L17—290・291、292 a b に示した線刻石等の出土もあるが省略する。

④鉄製品について

第四次発掘調査で出土した刀子状鉄製品については岩手県立博物館の御好意により、その解析結果をいただいた。そのことについては→(3)に述べてあるので省略する。また、S・P・L17—293に示した鉄製品は、出土層に疑問があるので省略したいと思う。

⑤骨類について (B・P・L1~5)

出土した骨類は、既述したとおり金子浩昌氏に鑑定していただいた。

当観音林遺跡の第一次~第五次にわたる発掘調査では毎回、獸骨・鳥骨等が出土している。特に注目すべきは、これらの骨類が焼けていることである。

このことは、当時の人々の食料調理において焼いて食用に供したものと考えられるところである。

⑥植物遺物について (S・P・L19—328)

この植物遺物については、既述したとおり木村 啓氏に同定していただいた。その同定書に指摘されている。むかれた種子皮であるという事実に注目したいと考える。

金子浩昌・木村 啓氏の御努力によって、観音林遺跡の動物相、植物相の一端が次第に明らかになりつつあることは喜ばしいことであり、また、岩手県立博物館の御好意によって時代は異なるが、平安期における鉄文化が相当高度な技術を有していたことも次第に明

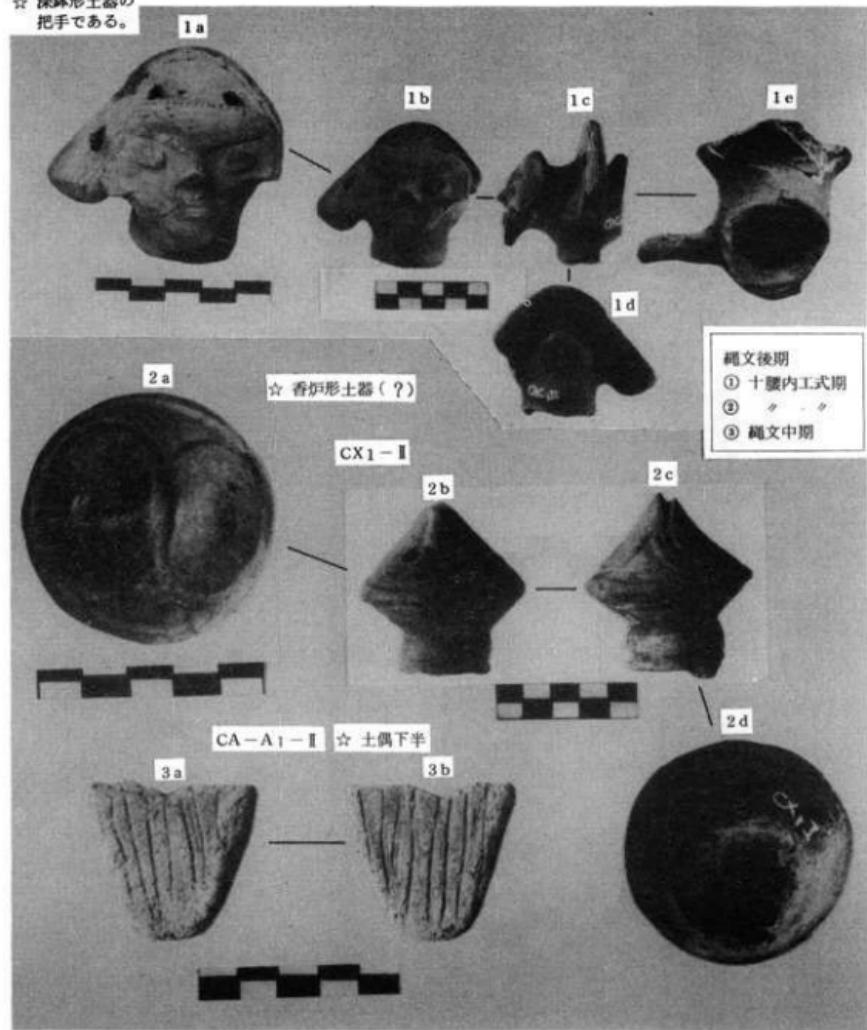
らかになりつつあることも研究者の一人として嬉しい次第である。

金子浩昌・木村 啓・赤沼英男の三氏に感謝申上げつつ考察の項をおわりたい。

(1987・3月 新 谷 記)

CB-C3-II (註、C地区BグリットII層出土の略—以下も同じ)

☆ 漢字形土器の
把手である。



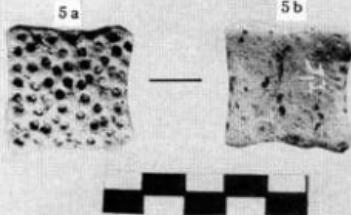
- (1) $6.3 \times 7.1 \times 5.4 \text{ cm}$
 (2) $6.1 \times 5.7 \times 0.6 \text{ cm}$
 (3) $3.6 \times 4.0 \times 1.76 \text{ cm}$

(註)
 (長径) × (縦径) × (横径) × (器厚) の順である。
 (以下も同じ)

CA-A₁ II

☆ 円盤状土製品

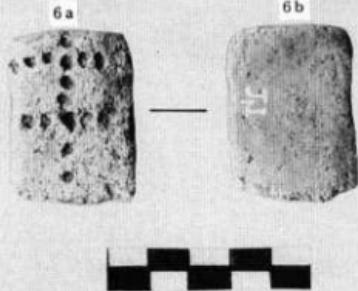
AJ 1 - II



- | |
|---------------|
| ④ 梗文後期、十腰内工式期 |
| ⑤ ク ク |
| ⑥ ク ク |

☆ 方形土製品

AJ 1 - II



☆ 長方形土製品

$$\left\{ \begin{array}{l} \textcircled{4} \quad 4.92 \times 4.22 \times 0.99 \text{ m} \\ \textcircled{5} \quad 2.88 \times 2.81 \times 0.67 \text{ cm} \\ \textcircled{6} \quad (4.29 \times 2.99 \times 1.51 \text{ cm}) \\ \qquad \qquad \qquad \text{現存部} \end{array} \right.$$

C B - D 1 - I

☆ 人面のある葺形土製品

7 a



7 b

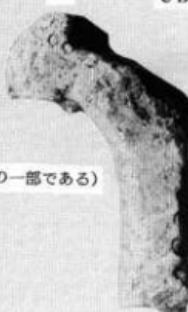


- ⑦ 縄文後期、十腰内I式期
⑧ タケ中期
⑨ 縄文晚期、大洞A式期

C B - D 2 - I

☆ 土偶（肩→胸の一部である）

8 a



C B - D 2 - I

8 b



8 c



A J 2 - I

9 a



9 b



9 c

☆ 棒状土製品の一部
(朱ぬり)

- | | |
|---|---|
| ⑦ | $3.6 \times 3.28 \times 0.78 \text{ cm}$ (顔面のみ) |
| | 2.33 cm (突起を含む) |
| ⑧ | $6.71 \times 4.20 \times 2.08 \text{ cm}$ (現存部) |
| ⑨ | $4.56 \times 3.98 \times 2.87$
(現存部) |

AK1-II上

10 a



10 b



10 c



☆ 土偶頭部

※ 目・口にアスファルトの充填あり。

AJ1-II下

11 a



11 b



11 c



⑩ 繩文晚期, 大洞A式

⑪ タタ, タタ

⑫ 繩文後期, 十腰内I式期

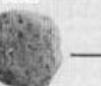
⑬ 繩文晚期, 大洞C2式期

⑭ タタ, タタタ

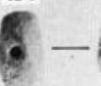
☆土製リング(朱ぬり)



12 a



12 b



12 c



CB-D1-II

13 a



13 b

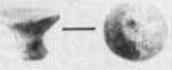


AK1-II

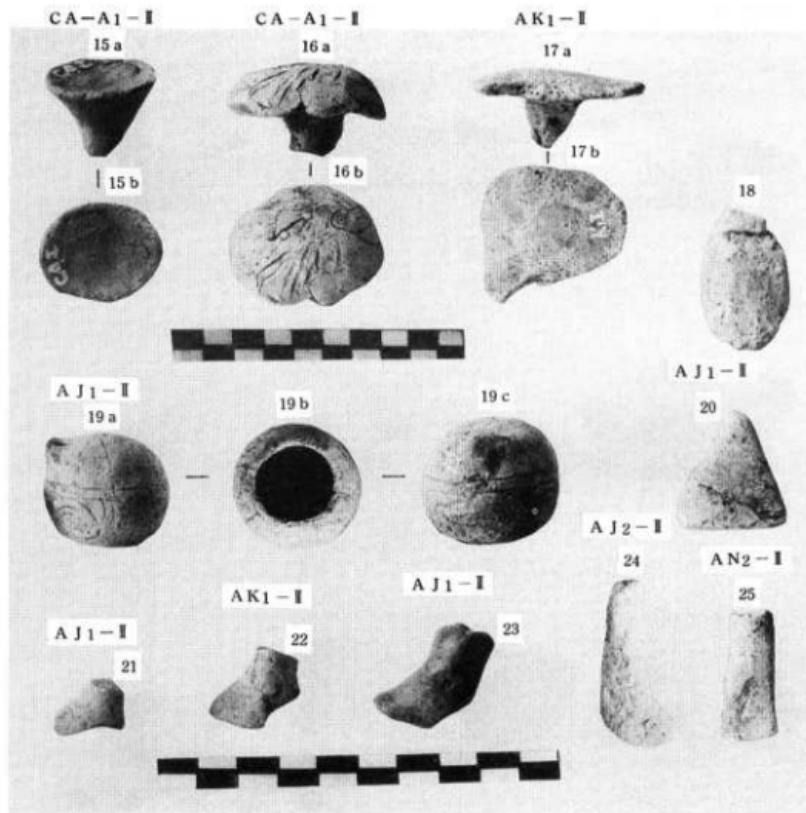
14 a



14 c

☆ミニチュア台付鉢形土器
(朱ぬり)

- ⑩ 4.18 × 3.02 × 3.18 (首部を含む)
 ⑪ 2.78 × 2.91 × 1.25 cm (内径 1.80)
 ⑫ 2.14 × 2.23 × 1.19 cm
 ⑬ 5.18 × 4.2 × 1.31 cm
 ⑭ 1.2 × 1.87 × 1.66 cm



☆ 舟形土製品	⑩ 繩文後期，十腰内I式期
☆ 异形土製品	⑪ ク ク ク ク
☆ 鍤形土製品	⑫ ク ク ク ク
☆ 三角形土製品	⑬ 繩文晚期，大洞C2式期
☆ 土器脚部	⑭ 繩文後期，十腰内I式期
☆ 台付台部	⑮ ク ク ク ク
☆ ク ク	⑯ ク ク ク ク
☆ 土偶脚部	⑰ 繩文晚期，大洞C2式期
☆ ク ク	⑱ ク ク ク ク

A K 2 - II

26

C A - A 1 - II

27

A K 1 - II

28

A J 2 - II

29



A J 2 - I

30



C B - B 2 - II

31

A J 1 - I

32



C B - B 2 - II

33

A J 1 - II

34

A J 2 - II

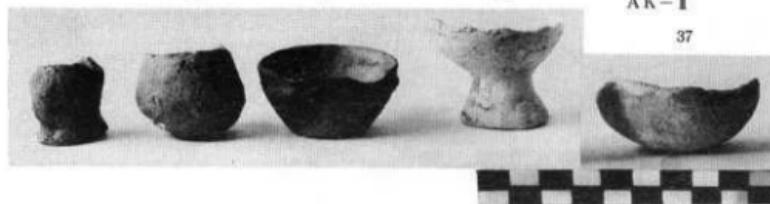
35

A K 2 - II

36

A K - II

37



㊂ 大洞C2式（縄文晩期）
㊃ 十腰内I式（縄文後期）

㊄ 十腰内I式（縄文後期）
㊅ →大洞C2式（々々晩期）

㊆ 歴史時代のものである。（平安時代後葉？）
㊇

㊈ 十腰内I式（縄文後期）
㊉ 手づくねで作られたもの

㊊ 大洞C2式（縄文晩期）
㊋

A J 1 - II

38

A K 2 - II

39

C A - A 1 - II

40



A J 2 - II

41

C A - A 1 - II

42

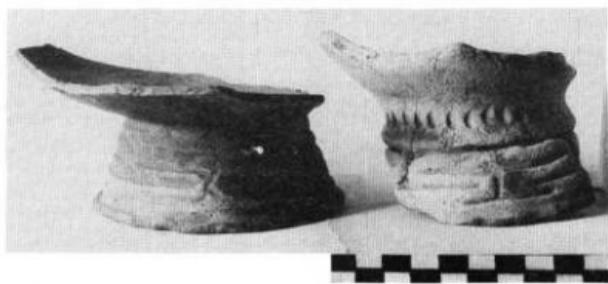


A J 2 - II

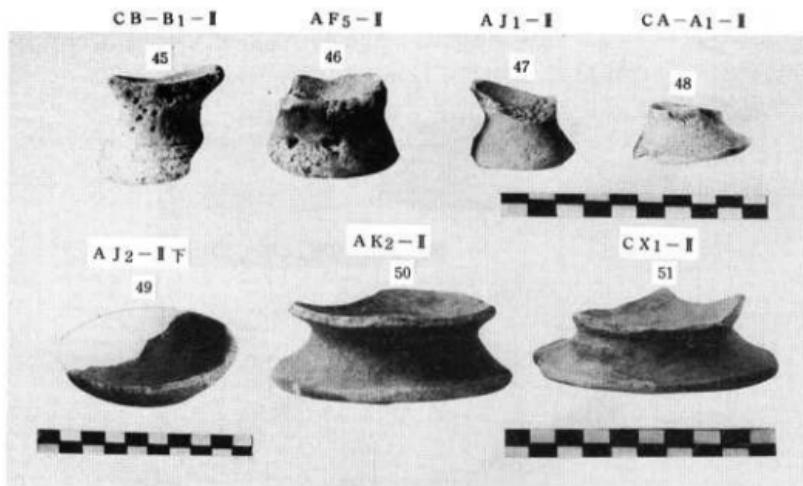
43

C A - A 1 - II

44



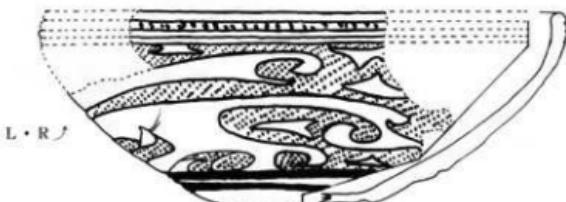
- ③ 大洞C₂式（縄文晩期）
 ④ 39・40は、径が大きいのに
 比して器高が低い。
 ⑤ →大洞A式（縄文晩期）
 ⑥ →大洞C₂式（タ　タ）
 ⑦ 大洞A式（タ　タ）
 ⑧ 入り組み工字文の施文が見
 える。



- ④ 十腰内I式(縄文後期)
 ⑤ 大洞C₂式(縄文晚期)
 ⑥ 十腰内I式(縄文後期)
 ⑦ 大洞C₂式(縄文晚期)
 ⑧ 大洞C₂式皿形土器(縄文晚期)
 ⑨
 ⑩ } 大洞C₂~A式台部(* *)

AJ 2 - Ⅲ中

52

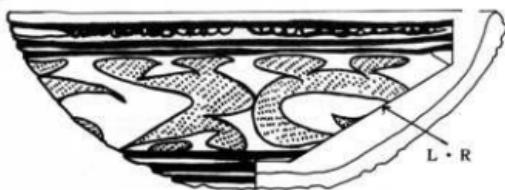


〔浅鉢形土器〕 -52 (図上復原)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区J2グリットⅢ層出土の、大洞C1式浅鉢型土器である。
- ・ 口縁は平縁のもので、頸部に細沈線を4本めぐらし、刻目文を施文している。肩部下には、磨消帯と縄文帯を見せるもので、磨消帯は研磨されている。
 - ・ 縄文帯は、大洞C1式文様パターンでは横方向に流れているが、肉彫りが重厚であり刻目文等から大洞C1式の後葉に属するものと考えられる。
 - ・ 縄文帯の縄文は、二段単節L・Rである。
 - ・ 色調は、器内外とも灰褐色で口縁部は暗褐色を呈する。胎土・焼成とも最良で精製土器である。

AJ 1-Ⅱ中

53



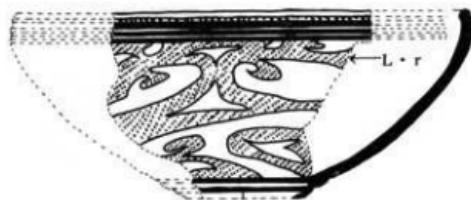
〔浅鉢形土器〕-53 (図上復原)

☆ ここに掲げたものも、A地区J1グリットⅡ層出土の浅鉢形精製土器である。土器型式は大洞C1式と思われる。

- この土器も、約 $\frac{1}{6}$ 程度欠失しているものであるが、カーブの計算から図上復原した。
- 口縁は平縁のもので、口唇部はやや丸味をなす部位もある。頸部には4条の細沈線がめぐらされ、刻目文が施文されている。底部直上には、3条の沈線文があり、肩部下より胴部には、X字文が繩文を充填して施文され、空間は、磨消帶をなし、研磨されている。
- 器形は、(52)に比して内傾はゆるい口頸部である。底面は平底なるも側辺は高くなっている。
- 色調は、器内外とも灰黒色を呈し、胎土・焼成は良好である。

AK 2 - II

54



〔浅鉢形土器〕 -54 (図上復原)

☆ ここに掲げた土器は、A 地区 K 2 グリット II 層出土の大洞 C 1 式精製浅鉢形土器である。

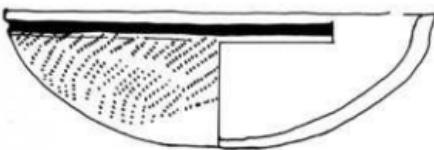
- このものは、現存部が約 $\frac{1}{6}$ 程度のもので、カーブの計算により図上復原したものである。
- 口縁は、平縁のもので、口頸部は内傾が強く塊形に近い器形である。
- 施文は、頸部に細沈線が 4 条めぐり、1 条と 2 条の間には刻目文が施文される。肩部から胴部へかけては、X 字文が施文される。施文されている繩文は、L + r の原体を用いた単軸燃糸文である。磨消帶は、ヘラ状工具によって横方向に磨かれている。
- 色調は、器内外とも、灰褐色を呈し、胎土・焼成とも良好なものである。

CA-A1-II上

55



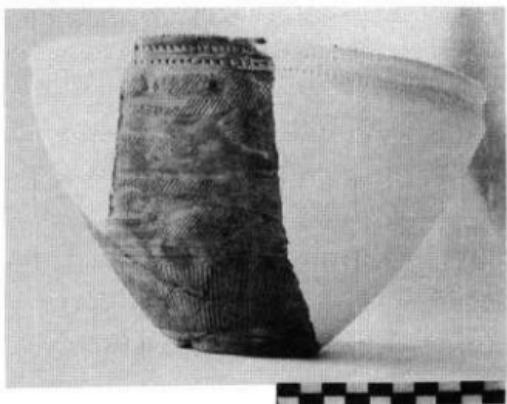
L・R→



〔皿形土器〕-55

☆ ここに掲げたものは、C地区AグリットA1区II層上出土の大洞C2式皿形土器である。

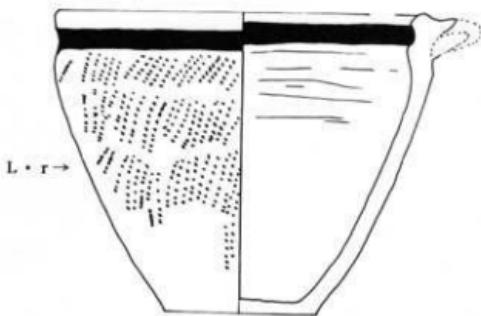
- ・ このものは、平縁で、頸部がやや外反する器形のもので底面は一部剥離しているものである。
- ・ 施文は、口縁下に浅く太い沈線文が1条めぐり胴部には、細い縄文が左下りにやや不整に施文される（L・R）、底面は、中央部は平底で、側辺はわずかに高い。
- ・ 色調は、器外面は灰黒色、内面は黄褐色で、内外面には黒色の斑点がある。胎土・焼成とも良好で、半精製土器とも言えるものである。



〔鉢形土器〕-56 (図上復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区J2-I層出土の大洞C1式精製鉢形土器である。

- このものは、現存部約 $\frac{1}{6}$ 程のものであるが、カーブ計算によって図上復原したものである。
- 器形は、口縁が小波状を呈しており、頸部には、3条の沈線がめぐっている。この頸部は、肩部から口縁にかけては内傾するもので、やや肩が張るものである。
- 胎部下半には3条の沈線があり文様帯を区画している。また底部直上にも2条の沈線文があり文様帯を区画している。文様帯は、刻目文のある頸部、横に広がる縄文を施文した大腿骨文と研磨された磨消帶をもつ胎部、胎部下半には紙位の単軸撚糸文帯がある。
- 色調は、器外面は灰褐色、内面は黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。



〔片口鉢形土器〕—57

☆ このものは、A地区K2グリットⅡ層出土の大洞C2式粗製片口鉢形土器である。

- ・ このものの器形は、口縁は平縁で、口唇部は丸味を有し、口縁はふくらむものである。頸部は、強くしほまり、肩部はやや張るものである。また底部は平底である。
- ・ 施文は、頸部に太い沈線が1条、口縁下の内面にも1条あり、この内面の沈線は片口部の横でとまるものである。
- ・ 脚部には、左下りのL・r燃系文がやや不整に施文される。単軸燃系文としてはきわめて粗末である。
- ・ 色調は、内外とも煮沸痕が付着のため黒色を呈するが剥離した面を見ると、元来は黄褐色と思われる。胎土・焼成は良い。

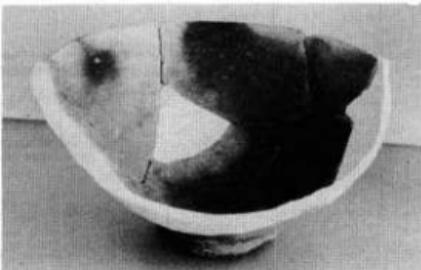
AK 2 - II

58 a



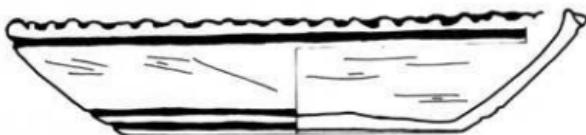
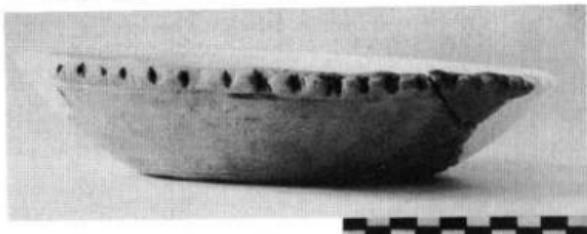
58 b

展示のため→
復原はこのよ
うにした。



〔台付鉢形土器〕-58 a, 58 b (図上復原)

- ☆ ここに掲げた土器は、A 地区 K2 グリット II 層出土大洞 A 式精製台付鉢形土器である。
- ・ このものは、口頸がやや外反気味のもので、ほぼ直線的に斜行して台部に至る胴部である。また、台部はきわめて低いが、作成時は一般的な器高（約 4 cm）を有していたものと観察されるが、台部が破損した後、下端を研磨して低くし、再生したものである。
 - ☆ 施文は、交互に入り組む文様でなく、上方にのみ山形に入り組むタイプで「入り組み工字文」の変形である。この文様タイプは今回の発掘で多数出土した。一タイプとして把握できる。
 - ・ 色調は、基本的に明黄褐色（内外とも）で一部は器内外とも灰黒色である。胎土・焼成は良い。



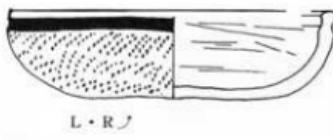
〔皿形土器〕-59 (図上復原)

- ☆ この土器は、A地区 J1 グリットⅡ層中位より出土した大洞C1 精製皿形土器である。
- ☆ 器形は、大形の皿であるが、口径に対して底径が大きく、器高も低いものである。当地方（津軽半島西部）の晩期中葉には出土数は少ないが、このタイプの大形皿が出土する。
 - ・ 口縁は平縁であるが、右下りの切り込みによって小波状を呈する。口縁の刻目下には沈線文が1条、底部直上に2条の沈線文がめぐるほかは無文である。
 - ・ 色調は、器外は明赤褐色を呈する。胎土・焼成とも最良である。

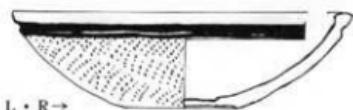
AJ 2-II

CA-A1-II上

60



61

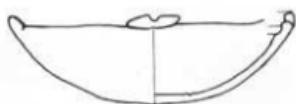
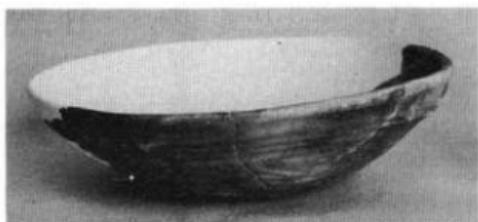


〔皿形土器〕-60・61

- ☆ ここに掲げた (60・61) は、いずれも大洞C2式の皿形土器である。
- このうち、(60) は平縁でやや肩部がふくらむ器形、(61) は、底部が広く、その直上が強くふくらむ器形のものである。
 - 施文は、(60) は頸部に2条の沈線文がめぐり、肩部には、二段単節L・R繩文が施文されたものである。また、器内面の口縁下には太い沈線文が1条めぐるものである。
 - (61) は、平縁で、口縁下より肩部にかけて、無文帯と言ってよい程、浅い太目の沈線文が1条あり、肩部下より底面まで、二段単節L・R繩文か左下りに施文される。
 - 色調は、(60) は、器内外とも明赤褐色、(61) は暗黄褐色を呈し、一部に黒色の箇所がある。

AK 2-II

62



AJ 2-II

63



〔皿形土器〕-62・63 (62図上復原)

☆ ここに掲げた62・63は、A地区K 2-II層、A地区J 2-III層出土の精製皿形土器である。

- このうち、(62)は、かるく弧状に張る胸部をもつもので、底面は上げ底を呈する。また、(63)は、平縁に2×1対の突起を四対つけるもので、弧状の胸部は前者と同じである。また底部は丸底である。
 - 施文は、(63)は、大洞C 2式の曲線的沈線文と、大洞A式の主文様である「入り組み工字文」の未完成な文様の2種が施文されるものである。すなわち、大洞C 2式の後葉に位置する文様要素を持つものである。(63)は、器内面の口縁直下に太い沈線文を1条もつほかは、無文のものであるが器内外とも朱ぬりである。
 - 色調は、(62)は内面黄褐色、外面も同様であるが二次的に火を浴びて黒色の部分が多い。胎土・焼成とも最良である。
- ☆ 朱ぬり土器は一般的に焼成がやわらかいように見られる。このことは、朱ぬりとの關係で考える必要がある。

AJ 2-II 64

AK 2-II 中



〔皿形土器〕—64・65 (65一部復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区J2-II、A地区K2-II中出土の大洞C2式(64)粗製大洞A式(65)精製皿形土器である。

- このうち、(64)は頸部が、しほまりかるく外反する口頸部で底部は丸底のものである。器内面には太い沈線状のクボミが一周し段を持つ特異な器形である。
- また、(65)としたものは、小突起と平行沈線を肩部にもち、かるく弧状にふくらむ器形で、底面はやや上げ底である。
- (64)は、無文土器で、口頸部は内外とも凸凹があり整形は粗雑である。この口頸部の整形は、指先の押圧によるものようである。色調は内外とも灰黄褐色を呈する。胎土に砂粒を含み、ザラザラしている。焼成もまた悪い。
- (65)は、胴部に「入り組み工字文」の典型的文様のもので、内面全体に朱ぬりが認められる。外面は朱ぬり痕がある。おそらく全面朱ぬりのものであったろう。

このものの底部付近は、黒色の部位があり二次的に火を浴びている。

☆ さきに(63)でも述べたように、朱ぬり土器の焼成はやわらかくなされたように観察される。(65)も同様である。

AK 2-II上

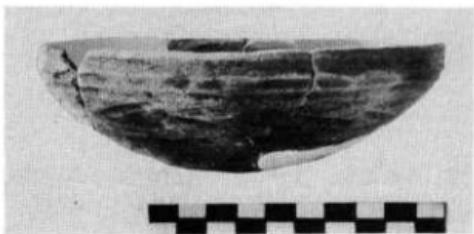


AK 2-II中

66

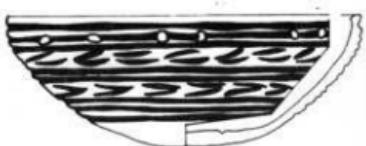


67

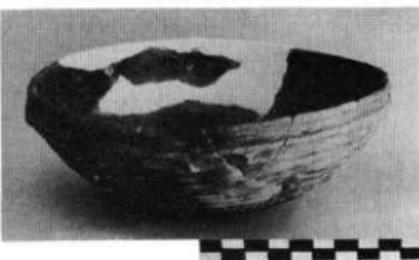


〔皿形土器〕-66・67 (図上復原)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K 2-II層上・中、出土の大洞A式精製皿形土器である。
- ・ 器形は、両者とも近似しており、弧状にふくらむ胴部のカーブもほぼ同じである。また底面も、(66・67)とも丸底に近い平底である。
- ・ 文様は、平行沈線によって区画された頸部・胴部・胴部下半の三段に文様帯が分けられ、頸部は、平行沈線と小突起、胴上半は綾杉文(矢羽根状文)が、胴下半は、綾杉文が逆の形にやや深く施文される。
- ・ 色調は、両者とも器外面赤褐色、内面暗褐色なるも(67)の内面は黄色が強い。また両者とも内外面の一部に黒斑部がある。胎土・焼成ともきわめて良い。



AJ 2-II



69



〔皿形土器〕-68・69 (69図上復原)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区J 2-II、K 2-II出土の大洞A式精製皿形土器である。
- この両者は、ともに平縁で、頸部はわずかに外反するが、肩部から胴部へかけてのカーブは、近似するが(69)の肩がやや張る器形である。また底部は、(69)は側邊がやや高く平底、(68)は丸底である。
- ☆ 施文は、(68・69)とも、既述の(66・67)と同様、文様帯が三つに分けられ、平行沈線一小突起、綾杉文、逆になる綾杉文のパターンである。すなわち、平行沈線で文様帯を三つに分け、既述のパターンで施文する手法は、「入組み工字文-平行沈線」というパターンと共に大洞A式の基本文様パターンであろう。
- これらのもののうち、(69)は、器内外とも朱ぬりの土器で、これも既述したように焼成はやわらかい仕上げ方である。(68)は器外面赤褐色、内面灰黄色で、両者とも胎土・焼成は良い。

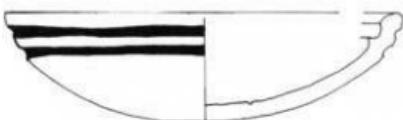
AJ 2-II

70



AK 2-II

71



〔皿形土器〕-70・71 (71一部復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区J 2-II・K 2-II層出土の半精製、精製皿形土器である。

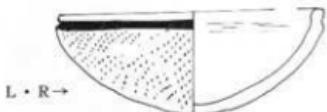
- このうち、(70)は大洞C2式、(71)は大洞A式である。
- 器形は(70)はゆるく弧を描くもので(71)と比較すると、外側へ開く器形である。また、(71)は、やや肩部が張り、外反気味の器形で、最大幅部が肩部にある。
- 施文について(70)は、頸部に2条の平行沈線文がある。また、内面に太い沈線文が1条めぐらほかは無文のものである。このものは底面丸底である。(朱ぬり痕がある)
- (71)は、さきに述べたとおり、平行沈線一小突記、綾杉文、送綾杉文という三つの文様帶に分けられる大洞A式の基本文様パターンを示している。
- 色調は、(70)は器外面明灰褐色、内面灰褐色。(71)は内面灰黒色、外面明黄褐色を呈するが两者共二次的に火を浴びて黑色斑点がある。胎土・焼成は最良である。

〔皿形土器〕

A P・L23

A J 1-II中

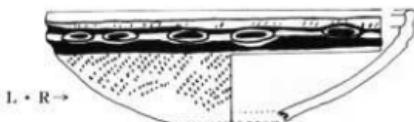
72



AK 2-II



73



〔皿形土器〕-72・73 (図上復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区J1-II層中位、K2-II層出土の(72)大洞A式、(73)大洞C2式土器である。

- 器形は、両者とも平縁で、弧状に胸部がふくらむが(73)が強くふくらむ。また底面は(73)は丸底、(72)は、多分やや上げ底と思われる。
- 施文について、(72)は、頸部は、刺突文を擦消しているが残っているものであり、肩部には連続して扁平なめがね状文(仮称)がある。(73)は頸部に沈線文か1条めぐる。また(72)には内面に浅く太い1条の沈線がめぐっている。
- 両者とも肩部より底部まで、二段単節(L・R)繩文が付されるが(73)の繩文は細く底面にも施文される。
- 色調は(72)は器内外とも灰褐色、(73)は、外面黄褐色、内面灰褐色を呈する。胎土・焼成は良い。

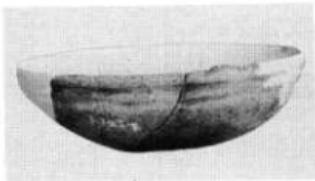
J 2-II下

75



AJ 2-II

74



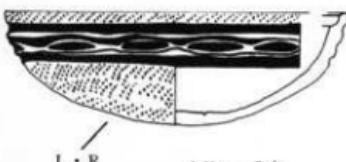
〔皿形土器〕-74・75 (図上復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区J 2グリットⅢ層、Ⅱ層下出土の大洞A式精製皿形土器である。また、両者とも朱ぬり痕のあるものである。

- このうち、(74)は、平縁に小突起を四対付するものらしい。(現存1対)口端はやや外反気味、胴部のふくらみは、下半でやや強く丸底を呈する。
- (75)は、平縁で肩部がやや張る器形であるが、胴部のふくらみは前者に比してゆるい。底面はやはり丸味をもつものである。
- 施文は(74)は頸部に2条の平行沈線文があり、器内面にも太く浅い沈線文があるが、小突起の中央で、口縁上端にのびる。(75)は、平行沈線文で区画された文様帶に(A P・L 20~22)で述べたとおり、〔①平行沈線文+小突起+②平行沈線文+綾杉文+③平行沈線文+逆綾杉文〕、という基本的文様である。
- 色調は(74)は黄褐色、(75)は灰褐色(内外とも)で胎土・焼成はよい。

A J 1 - II 中

76



77



〔皿形土器〕 - 76・77 (一部復原)

☆ ここに掲げた皿形土器は、A地区J1グリットII層中位、A地区K2グリットII層中位より出土した大洞A式精製皿形土器である。

- (76) は、口頸部がわずかに外反し、肩部がやや張るもので、胸部のふくらみがまろやかな器形である。なお底面は丸底である。
- (77) は、これも前者同様平縁で、口頸部がわずかに外反し、肩部の張りは強い。胸部は、ごくゆるく弧を描くもので底面は平底である。
- 施文は、(76) は、口端に左下りの L・R 繩文が密に施文され、頸部～肩部にかけては、平行沈線文とめがね状文（仮称）が連続して一周する。肩部下より底面までは、細かい二段単節 R・L 繩文が、回転方向を変えて 4 段に付されるものである。

☆ この口端に繩文を付すタイプは大洞A式の一タイプとして把握が可能である。

- (77) は、A・P・L24-(75) で述べたとおり、基本的文様パターンを示している。
- 色調は、(76) は、内外とも黒褐色で朱うるしみり、(77) は、器外面灰褐色、内面灰黑色で朱ぬり土器である。胎土・焼成ともよい。

〔鉢形土器〕

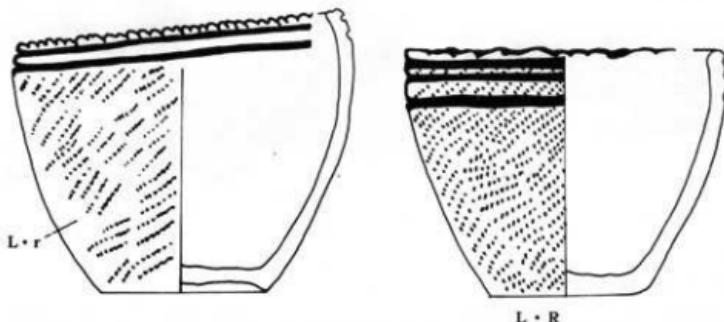
AK 2-II

78

CA-A 1-II

79

A P · L26



〔鉢形土器〕-78・79 (79一部復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットII層、C地区AグリットII層出土の大洞C2式粗製鉢形土器である。

- ・ 器形は、(78)は口頸部が内傾し肩部がまるく張るもので、口縁は小波状を呈する。また、底面は上げ底である。(79)も口縁は、小波状をなし、口頸部はやや内傾する器形で肩部は張らずゆるやかに内傾するもので底面は平底である。
- ・ 施文を観察すると、(78)は頸部に細い沈線文が2条あり肩部下には、L·rの撚糸文が左下り、横位（一部分）、右下り（一部分）等不整に施文される。また、(79)は、口縁が山形状に整形され頸部～肩部下に3条の沈線文がめぐる。このものも肩部には、L·R繩文が左傾する。
- ・ 色調は、(78)は器外面黒褐色、内面下半赤褐色、上半黒色、(79)は内外とも灰褐色である。胎土・焼成は良好であるが(78)は砂粒の混入が多い胎土である。

〔鉢形土器〕

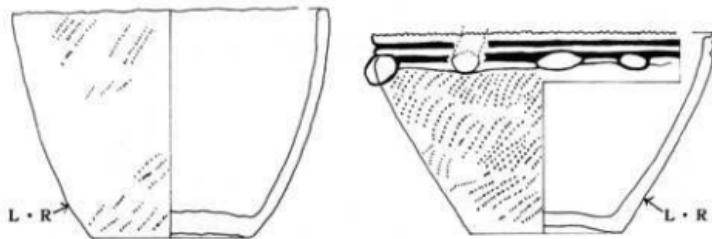
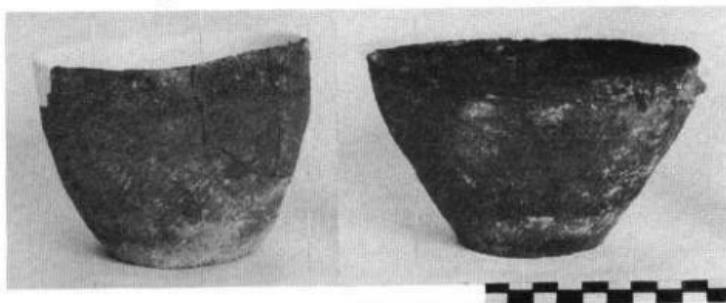
AK 2 - II

80

AK 2 - II

81

A P • L27



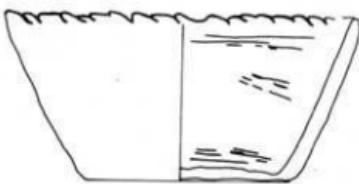
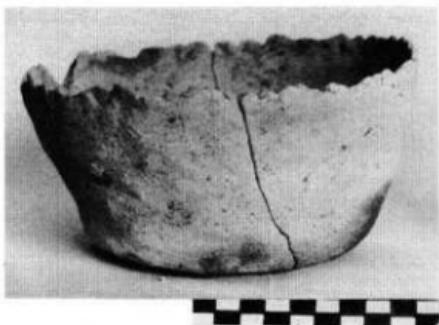
〔鉢形土器〕 - 80・81 (80→図上復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットII層出土の大洞C2式粗製鉢型土器である。

- このうち、(80)は、不整な平縁のもので、口縁下よりやや荒い二段単節L・R繩文が左下りに施文されるが、内外面とも煮沸痕のついたものである。

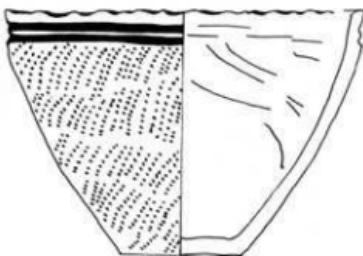
また(81)は、把手の左右に2こずつ計4この突出する小突起をもつものである。なお把手は欠落している。口縁は小波状を呈し、頸部には2条の沈線文がめぐり肩部下は、二段単節L・R繩文が左下りに不整に施文される。

- 器形は、(80)は、胴部はややふくらみ、底面が上げ底である。(81)は底径に対し口頸が大きく、直線的にひらく器形である。
- 色調は、(80)は内外とも上半黒色、下半赤黄褐色、(81)は、外面赤褐色、内面黒色を呈する。



〔鉢形土器〕-82

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットⅡ層出土の大洞C1式粗製鉢形土器である。
- ・ このものの器形は、口径に対して底径の大きいもので、底部から口縁にかけて直線的に開くものである。また、口縁は、大まかな刻目のあるもので小波状を呈し、左上より右下に切り込んだ刻目である。
 - ・ 施文はなく底面は平底である。器内外とも整形は悪く、デコボコな器面を呈する。
 - ・ 色調は、器内外とも赤褐色で明かるい。胎土には、細砂を中程度含み、ザラザラするが、焼成は良く堅緻である。
- ☆ このタイプの土器の出土が少なく特異なものであるが、若干の出土例はあるようである。



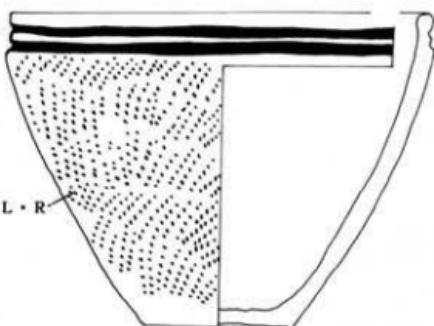
L・Rノ

〔鉢形土器〕-83 (一部復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区J2グリットII層下出土の大洞C2式粗製鉢形土器である。

- ・ このものは、底面径が小さく、わずかにふくらむ胸部を有し、肩部がやや張る器形で、口縁は、小さい山形突起が連続し、小波状を呈する。
- ・ 施文は、頸部に浅い2条の平行沈線文がめぐり、肩部下より底部までは、やや節の荒い二段単節L・R繩文が左傾している。また底面は、やや上げ底である。
- ・ 色調は、外面灰黒色、内面もやや濃い灰黒色を呈する。胎土・焼成ともよく、堅敏なものである。

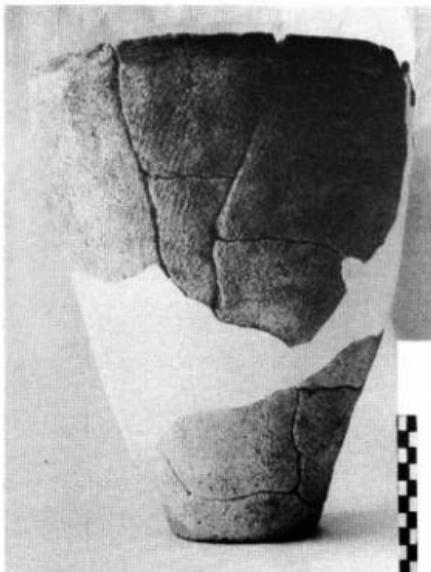
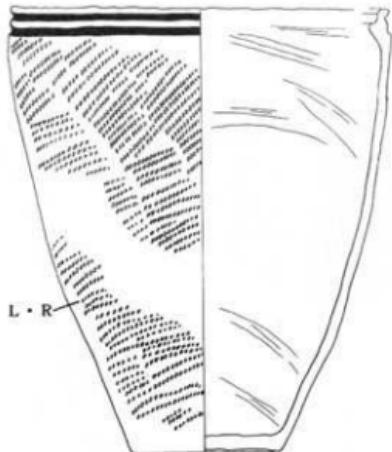
☆ なお、この器形は、一タイプとして把握できる器形である。



〔鉢形土器〕-84 (一部復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区 J 2 グリット II 層中位出土の大洞C 2 式粗製鉢形土器である。

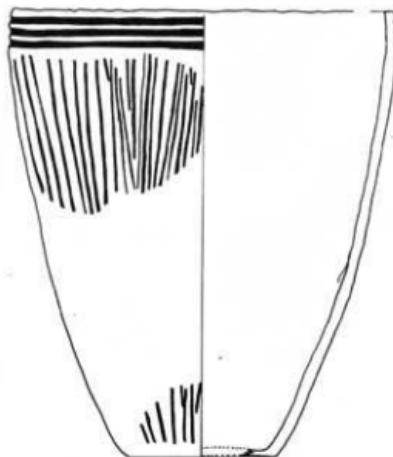
- この(84)の器形も典型的なータイプのもので、底面よりゆるく湾曲しながら口頸部が内傾気味のものである。また底面は、上げ底氣味のものである。
- 施文は、平らな口縁下に浅く2条の沈線文がめぐり、やや張り気味な肩部下より底部まで、左傾する二段単節 L・R 繩文が密に施文されるものであるが磨滅している。
- 色調は、器外面赤褐色、内面上半黒色、下半灰黑色を呈する。胎土・焼成とも悪いもので、砂粒を含みザラザラする器外表面である。



〔深鉢形土器〕-85 (一部復原)

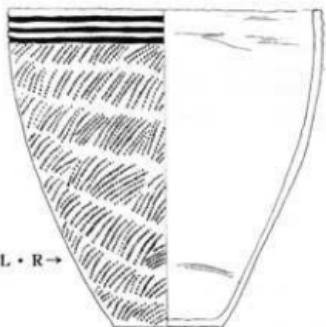
☆ この大形の深鉢は、A 地区 K 2 グリット II 層中位より出土した大洞 C 2 式粗製深鉢形土器である。

- このものは、口径、底径に比して器高の大きいもので、肩部がまるくふくらみ口頸部が外反気味のものである。また、口縁下の内面には段を有するもので、1 条の沈線文がめぐる（浅く太い）
 - 施文は、口縁下に 2 条の沈線文がめぐり、肩部下より底部までは節の荒い二段単節 L R 繩文が左下りに施文されるものである。
 - 色調は、器外面黄褐色なるも内外とも上半は二次的に火を浴びて黒色を呈する。
- ☆ この(85)のように大形深鉢で、口縁下の内面に段を有するものは、約15個体程出土しているが一タイプとして把握できるものである。



〔深形土器〕-86 (図上復原)

- ☆ ここに掲げたものも A 地区 J 2 グリット II 層下出土の大洞 C 2 式粗製深形土器である。
- このものの器形は、やはり底径が小さく器高の高いもので、胴部上半より口縁に向ってゆるく内傾する器形のもので、底面はわずかに上げ気味である。
 - 施文は、平縁の口縁下に、3 条の沈線文がめぐり、肩部下には、いわゆる条痕文が底部上まで施文されるものである。
 - 色調は、器外面上半は灰黒色、下半は灰褐色をなし、内面は、暗黄色を呈する。胎土・焼成は良く堅緻である。
- ☆ この土器も一タイプとして把握できるものである。すなわち、大形深鉢の典型的一タイプである。この類のものの出土量が多い。



〔深鉢形土器〕-87 (図上復原)

☆ この土器は、A地区J2グリットII層下出土の大洞C2式粗製深鉢形土器である。

- 器形は、平縁で胸上半から口縁にかけてゆるくふくらみ内傾気味の口縁に達するカーブを描くもので、A・P・L31-(85)に示すものより口径幅が広いタイプの土器である。
- 施文は、3条の平行沈線文が頸部をめぐり、肩は張らないもので、この肩部下より底部まで、左下りのL・R繩文が施文されるものである。なお底面はわずかに上げ底である。

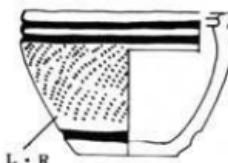
☆ A・P・L31-(85) A・P・L32-(86)と本土器を入れた3タイプの大形深鉢は、その出土量が多いものであって、本報告書では、一例ずつ掲示したが、活用度の高い用器であったと考えられる。

〔鉢形土器〕

A P・L34

AK 2-II 88

89 AJ 2-II 下



〔鉢形土器〕 -88・89

☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットⅡ層出土の大洞A式精製鉢形土器(88)、およびA地区J 2 グリットⅡ層下位出土の大洞C 2 式粗製鉢形土器である。(両者とも小形土器)

- ・ 器形は、(88)は小形ながら、この型式の典型的なもので、平縁で口唇部が丸味を帶びて薄く、肩部が張り口頸部がやや内傾氣味のもので、胴部が直線的にしほまり底部につづく器形で底面は平底である。
- ・ (89)は、平縁で口唇部は一部平面に整形され、頸部はやや外反氣味で肩部がわずかに張るものである。胴部は、ゆるくふくらみ、底面は上げ底である。
- ・ 施文は、(88)は、展開図に示すとおり、入り組み工字文と平行沈線文のある規格的な施文である。(89)は、頸部に2条の沈線文、肩部下は左下りのL・R縄文が施文される。
- ・ 色調は、(88)は外面暗褐色、内面灰黒色、(89)は、外面灰黒色、内面黄褐色を呈する。胎土・焼成は、前者は最良、後者も良いものである。

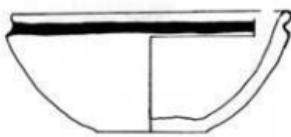
〔鉢形土器〕

AK 2 - I 90

AK 2 - I

A P · L35

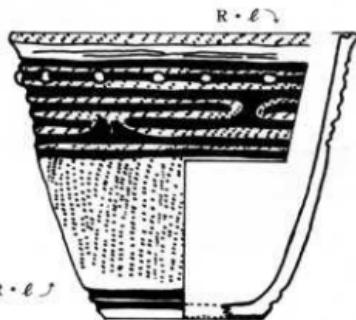
91



〔鉢形土器〕 - 90・91

☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットⅡ層出土の大洞A式精製鉢形土器と大洞C2式の半精製鉢形土器である。(なお91は大洞C1式よりつづく可能性があるように考えられる)

- 器形は、(90)はA·P·L88と比較すると殆んど近似する器形で、わずかに(90)は、口縁上端がうすく整形されている。すなわち、肩部が張り直線的にしほまつて底部に至る器形である。
- (91)は、平縁で、肩部が張る特徴をもつ器形で、胴部はゆるやかにふくらむ器形で、底面はやや中高のものである。
- 施文は、(90)は平行沈線文と入り組み工字文が二段に施文されるものである。(91)は、頸部に深い沈線文が1条めぐり、肩部下は無文である。また、内外面とも横方向に整形されている。
- 色調は、(90)は内外とも黄褐色、(91)は外面灰褐色、内面黒色で、この内面の黒色は内面を塗り込んだ可能性がある。両者とも胎土・焼成は良い。



〔鉢形土器〕-92 (図上復原)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K1グリットⅡ層出土の鉢形半精製土器である。
- このものは、口縁が外反するもので、口径に対して底径がやや大きいものであって、底部直上がふくらむ器形のものである。底面はやや上げ底のものであろう。
 - 施文は、口縁上端に左下りのR・ℓ撚糸文が押圧され、頸部は一見無文体をなすように見られるが、わずかに2条の沈線文がナデのように浅く見られる。肩部下より胴中央部にかけては、沈線を引いて集ったと観察される粘土を押圧して整形した粘土粒を配置し、入り組み工字文が二段に施文されている。
- 胴下半には、R・ℓ撚糸文が縦位に施文され、底部直上に2条の沈線文がめぐるものである。
- 色調は、外面灰褐色、内面黒褐色で胎土・焼成は良く堅緻である。
 - 沈線を引いた際に集まつた粘土を、まとめて押圧整形し、器面に配置する手法は、つきの砂沢式粗製土器にも観察され、この手法は、大洞A式期に初現するようである。



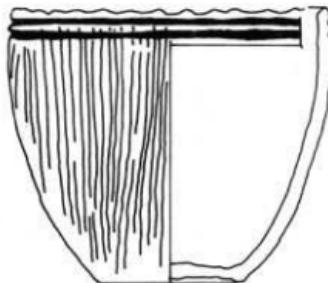
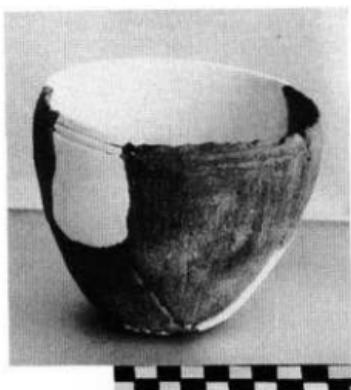
〔鉢形土器〕-93 (図上復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区J2グリットII層下位より出土した大洞A式半精製鉢形土器である。

- このものは、波状口縁で2対1対の山形突起が6対口縁に付けられるもので、口頸部が外反し、肩部が張り、直線的に底部に至る胴部を有する器形で、底面はやや中高の平底である。
- 施文は、山型突起の下位に側方に突き出る2対1対の突起を付し、また、肩部にも、粘土粒を付すもので、入り組み工字文の変形文が一段施文される。胴部下半には、二段単節L・R縄文が左傾するが、胴上半は地文に縄文を施文した後沈線文を施文したものと思われる。
- 色調は、外面灰褐色、内面上半黒色、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成は良い。

A J 1 - II 中

94



〔鉢形土器〕-94 (図上復原)

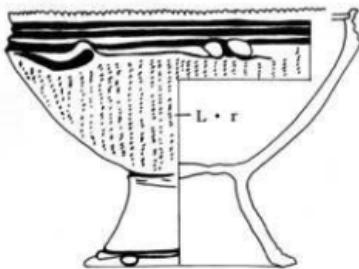
- ☆ ここに掲げたものは、A地区J 1 - II層中位出土、大洞C 2式粗製鉢形土器である。
- このものは、口縁が小波状を呈し、ゆるくふくらむ胴部を有する器形のもので、底面は上げ底を呈するものである。
 - 施文は、頸部に2条の沈線文を有し、肩部より胴部には条痕文が縦位に施文されるものである。
 - 色調は、器外面灰黒色、内面灰黄色で内外とも一部に黒斑の部位もある。胎土・焼成とも良好である。
- ☆ この条痕文が施文される土器は、A・P・L 32-(86)に示すように大形深鉢に多く施される文様である。



〔台付浅鉢形土器〕 -95 (一部復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットⅡ層下位より出土した大洞A式精製台付浅鉢形土器である。

- このものは、口縁にやや外反する2と1対の突起を4対付すもので、肩部が張る器形である。台部は浅鉢に比較して、径の小さい台部である。
- 施文は、平行沈線文、小突起、入り組み工字文というパターンは規格どおりである。また台部には平行沈線文が施文されるものである。このものは、台部の文様が入り組み工字文になっていないのが特徴である。
- 色調は、内外とも朱ぬりのもので赤黒色を呈する。肉眼的観察では、朱うるし塗りのものと考えられる。胎土・焼土とも最良である。

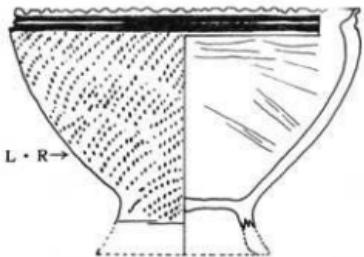


〔台付鉢形土器〕-96 (図上復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区J1グリットⅠ層中位出土の大洞C2式粗製台付鉢形土器である。

- ・ このものは、口縁に細かい刻目があって小波状を呈しており、口頸部が外反し、肩部が張る器形で、胴部はゆるくふくらみ、台部は末広がりに開くものである。
- ・ 施文は、刻目文、平行沈線文2条、肩部には側方に突出する小突起が付せられ、胴部には、細かい単軸撚糸文(L・r)が回転によって施文される。また、台部の下端には沈線文と小突起が付されている。
- ・ 色調は、鉢部外面灰黒色、内面黄褐色、一部黒色・台部は、明赤褐色を呈し、胎土・焼成は良好である。

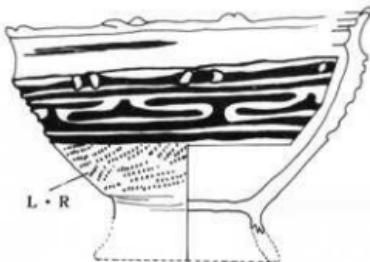
☆ この土器には、大洞A式の要素(突起の形態)もあり、大洞C2式後葉のもののようにある。



〔台付鉢形土器〕-97 (図上復原)

☆ ここに掲げたものもA地区J1グリットII層中位出土の大洞C2式粗製台付鉢形土器である。

- ・ このものは、現存約 $\frac{1}{2}$ 弱であるが図上復原した。器形は、口縁が刻目によって小波状を呈し、肩部がふくらむ特徴を有するもので、台部は不明であるが低く末広がりになるものらしい。
- ・ 施文は、口縁に刻目文・頸部に2条の沈線文がめぐり、肩部下より胴部には、二段単節L・R繩文が密に施文される。台部は無文のようである。
- ・ 色調は、外面赤色を帯びた灰黒色、一部黒色を呈する。胎土・焼成とともに良く堅緻である。



〔台付鉢形土器〕-98 (一部復原)

☆ ここに掲げたものは、C地区AグリットA1区II層下位出土の大洞A式粗製台付土器である。

- このものは、口縁が平縁であるが低い山形突起が4対とその間に、さらに低い小突起が四対つけられるものである。頸部は強くしほまり肩部が張る器形で、肩部下がふくらみ、台部は末広がりに開くものである。
- 施文は、頸部は無文帶で、肩部には、2×1対の粘土粒を付し、肩部下には、平行沈線文と、入り組み工字文の変形した文様が沈線によって付けられている。また胸部上半より台部までは、二段単節L・R楕文が左下りに斜行、横走して施文され、台部は無文である。
- 色調は、器外面は灰黒色、一部赤褐色、内面は灰黒色、一部灰褐色を呈する。胎土・焼成とも良好で堅緻である。

☆ このものの器形・粘土粒の形態、入り組み工字文の変形等を観察すると大洞A式でも、一型式前の大洞C2の要素が強く残るもので、大洞C2式末よりA式に至る過程ものと考えられる。今回の調査では、このパターン(施文)のものが相当出土があった。一つのパターンとして把握できると考えている。



〔台付浅鉢形土器〕-99 (台部図上復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットII層下位出土の大洞A式精製台付浅鉢形土器である。

- このものは、平縁でわずかにふくらむ胴部をもち、台部もやや末広がりに開く器形である。このタイプは、大洞A式台付土器の一つのタイプとして捉えられるものである。
- 施文を観察すると、平行沈線文+小粘土粒、入り組み工字文+無文帯という浅鉢部の文様構成である。台部も入り組み工字文が施文されるものである。
- 色調は、器内外とも黄褐色を呈するが、内外に黒色の斑点が残る。胎土・焼成とも最良である。

AK 2 - I

100



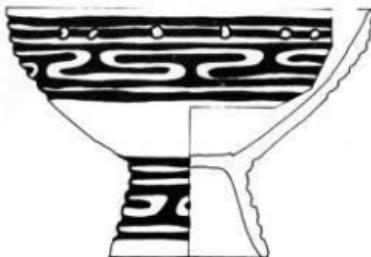
〔台付浅鉢形土器〕 - 100 (台部下端欠損)

☆ ここに掲げたものは、A地区K2 グリットⅡ層出土の大洞A式精製台付浅鉢形土器である。

- このものの器形は、A・P・L43- (99) や、つぎのA・P・L45- (101) に比べて、やや肩部が張る点、胸部のふくらみが小さく直線的に斜行する点等に特徴が認められるものである。
- 施文を観察すると、平縁下に平行沈線文+小突起、入り組み工字文+無文帯という構成であって、(99・101)と同じ文様構成を示すものである。また、台部下端は欠損しているが、平行沈線文+入り組み工字文+平行沈線文という。浅鉢部と同じ構成であって、この期の精製土器の規格性を示しているように考えられる。
- 色調は、器内外とも黄褐色であるが、浅鉢内の底と台部の内側は黒色を呈する。胎土・焼成とも最良である。

AK 2-II

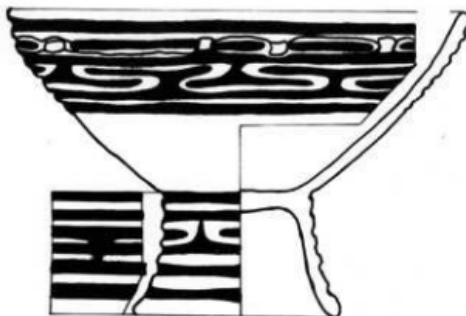
101



〔台付浅鉢形土器〕-101 (一部復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットⅡ層出土の大洞A式精製台付浅鉢形土器である。

- このものの器形は、口縁は平縁でやや外反気味であり、肩部から胴部にかけては、軽くふくらむもので、台部は末広がりなるも直線的である。
- 施文は、A・P・L44- (100) で述べたように、平行沈線文+小突起、入り組み工字文+無文帶という規格どおりの文様構成である。また台部は、入り組み工字文の変形が施文されている。
- 色調は、器内外とも灰黒色、浅鉢部底部および台部内側は黒色を呈する。胎土・焼成とも良好で堅緻なものである。

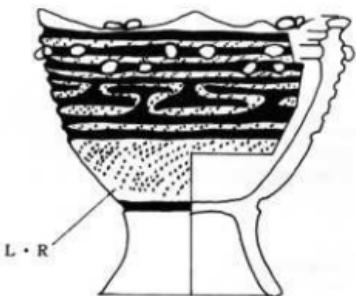


〔台付浅鉢形土器〕 - 102 (一部復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区J2グリットII層下位出土の大洞A式精製台付浅鉢形土

器である。

- このものの器形は、平縁で肩部が張らずゆるくふくらむ胴部と、末広がりの台部をもつものである。
- 施文は、既に述べたように、平行沈線文+小突起、入り組み工字文+無文帯という規格化された施文である。台部もまた、浅鉢部と同様である。なおこの台付の入り組み工字文は、一部裏側まで貫通している。
- 色調は、器内外とも灰褐色を呈するが一部黒色である。胎土・焼成とも最良である。



〔台付鉢形土器〕-103 (一部欠損)

☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットII層出土の大洞A式半精製鉢形土器である。

- このものは、波状口縁のもので、山形突起が4対とその間に4対の小形突起が配置されるもので、A・P・L42-(98)と同様のパターンを示している。

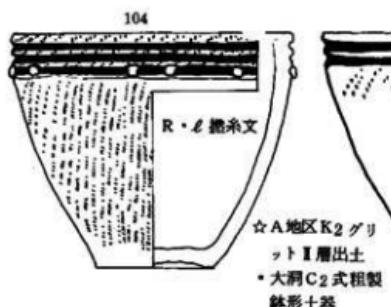
肩部より胴部にかけては、ふくらみがやや強いものである。台部はスンナリと末広がありのものである。

- 施文は、平行沈線と小突起が二段、入り組み工字文+繩文帯という構成である。また、台部は無文である。胴下半の繩文は、胴部上半にも地文として施文されたものと同じ原体を用いたものと観察され、左傾する二段単節L・R繩文である。
- 色調は、器外面灰黒色、内面は黒色、台部は内外とも灰褐色である。胎土・焼成とも良好である。

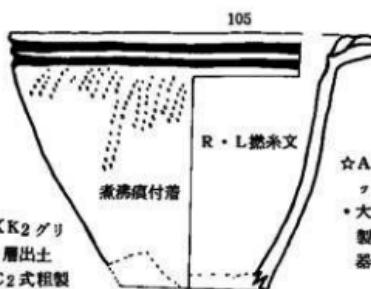
〔鉢形・片口鉢形土器〕—(写真表示せず)

A P · L48

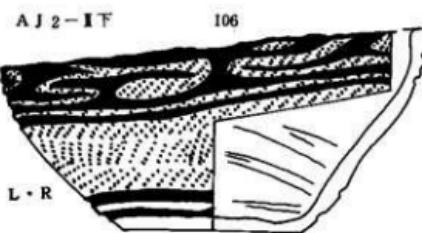
A K 2 - I



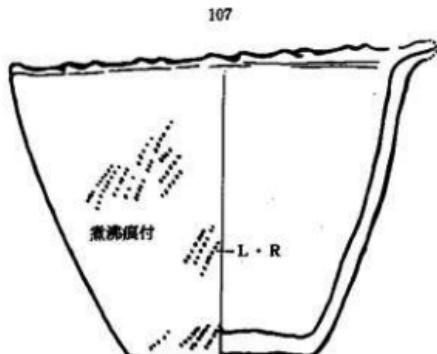
A J 2 - I 下



A J 2 - I 下



A J 2 - I 下



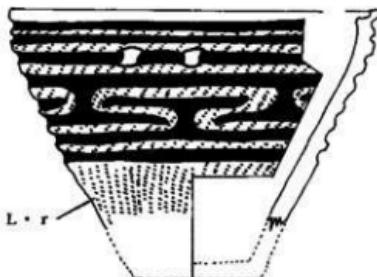
〔鉢形・台付浅鉢形土器〕—(写真表示せず)

A P · L49

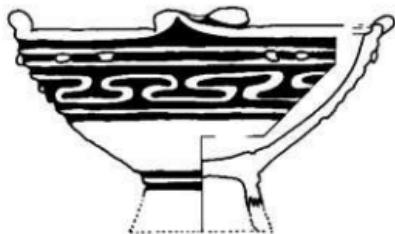
A J 2 - II 下

108

- ☆A地区J 2グリット
II層下出土
・大洞A式粗製鉢形
土器
- ☆A地区K 2グリット II層出土
・大洞A式粗製台付鉢形土器



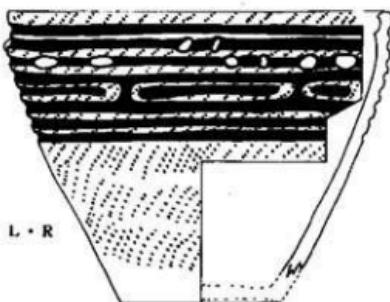
AK 2 - II
109



- ☆A地区K 2グリット II層下出土
・大洞A式精製鉢形土器

110

AK 2 - II 下





AK 2 - I



〔壺形土器〕 - 111・112

☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットⅡ層出土の大洞C2式壺形土器である。このうち、(111)は半精製、(112)は精製である。

- ・ 器形は、(111)は口頸部はやや外反するもので長い頸部をもち、肩部は張らず最大幅部は胴上半にある器形で、胴部のふくらみはやや強く、底面は上げ底気味のものである。
- ・ (112)は、いわゆる洋梨状の形態をなすもので、口縁が開く器形である。このものは、大洞C2式の壺形土器の典型的な器形で一タイプをなすものである。
- ・ 施文は、(111)は、口頸部は無文、肩部との境に1条の沈線文があり、胴部には、二段単節L・R縄文が、やや左下りに施文される。
- ・ (112)は、縄文ではなく、縦位に2こ並ぶ小粘土粒と横位に並ぶ2こ1対の粘土粒が側方に突出するように付けられ、沈線文が4条めぐる他は無文で、赤色顔料が塗られたものである。
- ・ 色調は、(111)は灰褐色、(112)は、内外面とも黒色を呈する。胎土・焼成とも最良である。

〔壺形土器〕

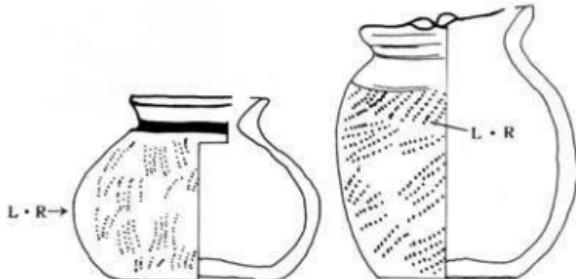
A P・L51

AK 2-II

113

114

AJ 1-II



〔壺形土器〕 - 113・114

☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリット、J1グリットのII層より出土した大洞C2式粗製壺形土器である。

- ・ 器形は、(113)は、口頸部が強く外反し、胴部の最大幅部は、中央下にあるもので底面径が大きく、上げ底のものである。
- ・ (114)としたものは、形態が不整なもので、口頸部の外反は強く、胴部はふくらみを持つもので、底面は平底である。
- ・ 施文は、(113)は頸部下に沈線文、胴部にはL・R縄文がある。(114)は口頸部が無文、肩部下より胴部には、細かいL・R縄文が左下に施文されるものである。
- ・ 色調は、(113)は器内外とも明赤黄色、(114)は、外面黄褐色、内面灰黒色を呈し、胎土・焼成とも(113)は悪く、(114)はやや良いものである。